
絶滅種

てつまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶滅種

【Nコード】

N0238R

【作者名】

てつまる

【あらすじ】

中国を発症の地として世界中でインフルエンザのパンデミックが発生した。

非常に高い毒性を持ち、発生から僅か3週間で地方を中心に中国全土で人口の半数に近い6億5千万人が死亡した。

何とかその場をしのいだ人類であったが・・・そのインフルエンザの特効薬がさらなる不幸を人類にもたらした。

これは、モバゲーに方で執筆していた作品ですが・・・加筆修

正してこちらで連載を継続させていただきます。

無謀にも、ゾンビ物の3作を同時執筆。乞うご期待下さい。

ブローグ：2008年 冬

2008年11月。

中国を発症の地として世界中でインフルエンザのパンデミックが発生した。

大方の専門家が予想していた、鳥インフルエンザではなく、豚インフルエンザの突然変異であった。

非常に高い毒性を持ち、発生から僅か3週間で地方を中心に中国全土で人口の半数に近い6億5千万人が死亡した。

感染から発症までの潜伏期間が3週間と長く、発症すると、僅か1日で40度を越す発熱とコレラ並みの下痢を引き起こし、極度の脱水と高い毒性物を血中に発生させ、最短で2日程で死に至しめる最悪のインフルエンザであった。

中国で一気にエンデミックが発生し、全世界に知れ渡ったと同時に、各国のあちこちで死のインフルエンザが息を始めた。

日本も例外ではなく、全国各地で広がりを見せているなか、長野県だけが非常に発症率が低く、通常の1/100程度であることが判明した。

長野県では、県下にある製薬会社、ワイルドフューチャー製薬（国内1位、世界7位）が全社を挙げて解明に乗り出したところ呆気なく原因が判明した。

長野県で一大ブームになり95パーセント以上の県民が飲んでいた、県下の美味しい山水（地下水）の成分が、劇的にインフルエンザウイルスを破壊（無効化）していたのであった。

その地下水に含まれていた成分は、現在の化学界では未知の分子構造であり、ワールドフューチャー製薬の取締役副社長であり世界的なウイルス研究者である、金本^{かねもと}太^{ふとし}は未知成分が人にもたらず副作用を懸念し、慎重な臨床を主張したが時の政府やWHO、並びに列強の国々はその事実を隠蔽し、全世界に地下水を配布した。

その英断で人類は一度は助かったのである

。

ブログ：2008年 冬（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております

序章：覚めぬ危機

2008年 11月に中国を発症の地とした、インフルエンザ、パ
ンデミックは、「チャイナ・インフルエンザ」として人々の記憶に
残され、中国は人口の半分を、それ以外の国々も人口の20パーセ
ント、35パーセントを失った。

『中国某省』 2009年4月。

皮肉な話ではあるが、人口の半分を失った中国は慢性的な食料不
足から抜け出すこととなった。

反面、世界一の人口を背景とした市場力は低迷し国民の所得は大き
く低迷し、世界各国からの援助なしでは国が成り立たない状態であ
り、地方では、貧困と飢えで慢性的な暴動が頻発していた。

中国政府は、チャイナ・インフルエンザの鎮静化の後に、当該地域
の「豚」は全頭処分したと声明を出していた。

しかし、某省内に駐留していた人民解放軍の高官が韓国経由で米国
に亡命し、中国革命軍自体がチャイナ・インフルエンザの影響で兵
員が確保出来ないことや、豚を飼育していた農村の農民が感染死亡
してしまい、村は廃村となり、家畜が野生化してしまい全頭処分な
ど到底不可能であることを米国議会で証言したのだ。

その証言を元に、WHOの組織を中心とした、化学医療研究隊が米
軍主導の国連軍に警護され、チャイナ・インフルエンザ最初の発症
地と推測される中国某省に調査に赴いていた。

野生化した豚が捕獲され調べられた結果、中国では依然として、豚からチャイナ・インフルエンザが発症する危険性が非常に高いことが判明した。

しかも、中国国内の田舎町では以前にもまして貧困は深まり、餓死を待つか野生豚を捕獲し満腹になり、インフルエンザに怯えるかの選択肢しかない状態であった。

世界各国からの食料援助も、中国国内の内政腐敗で100の物資が田舎に届く時点で5にも満たず、野生豚を食するしか生きる術がなかった。

これらのことから、WHOは、チャイナ・インフルエンザの再発生を撲滅する活動と平行して、新型インフルエンザワクチンの開発に乗り出した。

始まり：セカンドパンデミック

2009年9月。

ワールドフューチャー製薬のワクチン開発チームが、長野県の地下水の未知成分を利用し、ワクチンを完成された。

翌10月より、世界各国の首脳や政府関係者、医療、軍・治安関係者に優先的にワクチン接種が開始された。

一般市民には遅れて12月のクリスマスから接種が開始された。

国家規模の接種計画はほとんどの国で、希望者には年内に接種されることになった。

誰もが予想だになかった事態を人類は自ら選択した瞬間であった。

2009年1月15日

大阪 難波宗右衛門町のとある居酒屋。

「では、亡き友。黒田祐介と白井健一郎の冥福と。ここにいる全員が生き残れたことに感謝し乾杯！」

今回の発起人であり、関西浪速大学・第4期ラグビークラブ主将の、川口信一が乾杯の音頭をとり、テーブルを囲んだ男達も口々に「乾杯！」と、手に持ったジョッキをぶつけ合った。

テーブルを囲んだ7名はとても、ラグビークラブ出身とは思えない、

どこをどう見ても普通のサラリーマンだった。

大学時代は、練習よりミーティングと称した飲み会とコンパに明け暮れた普通の大学生と何ら変わり映えしない、所詮は同好会のメンバーであつた。

それでも、同好会として大学に認知されていたのは、メンバー全員が高校時代に他競技などで十分な実力を持ち、関西のラグビー同好会ではトップクラスの實力だったからである。

「黒田と白井がチャイナ・インフルエンザで死んでから1年たったまいったなあ。」

阿部勇次が、ホツケを食べるわけでもなく箸でつつきほぐしながら、誰に言うわけでもなく話し始めた。

「結構、周りの奴達がバタバタと逝っちまってよ。俺の部署なんざあ、15人もいなくなつて、俺が最年長者になつちまったよ。まだ『命の水』が外国より早くに供給されたのが救いだよな。ヨーロツパの支社なんて、全員お陀仏だもん。」

「んだな。ほとんどの日本人が親類や会社の同僚や親近者の誰かを亡くしたんだ、最愛の恋人が！妻が！子供！がなんて話しに同情してたらキリがない状態だかな。」

阿部がほぐしたホツケに箸を伸ばしながら、中沢剛はうんざりするように相槌をうつた。

「まあその分、12月と1月は、どんな会社でも法事休暇には文句言われねえからな。でなきゃ、俺も12月にじいちゃんと母ちゃん

の法事で休暇とったばかりだったから、連続で大阪に帰ってこれへんかったわ。」

「しかしよ。今年もチャイナ・インフルエンザのパンデミックだってテレビで言われてるだろ、お前らはワクチン接種したかの？」

稲本隆之が、僅かジョッキ一杯で顔を真っ赤にしながら一同を見回した。

「そうそう！お前。ワクチンは打つな。いざと言う時は『命の水』（長野県の地下水）飲め。って送ってきたよな。」

川口が返事をした途端。

「俺んところにも来たぜ」

「俺も」と……

全員に送られていた事が判明した。

「何だ、お前。全員に送ってたんかよ。」

本田信正は、稲本の肩をバンバン叩きながら最期には、肩をがっしりと掴み息がかかる程顔を近づけ小声で続けた。

「お前、長野のワールドフューチャー製薬に転職してたよな？水の発見もワクチンの開発もあそこやんな？何ぞ、秘密でもあるんか？まさか、またの名をアンブレラコーポレーションとか言っつて、変な研究してへんやろな？」

「の・信正」。お前、30になっても、バイオ君やってんのか？アリスやアンデットなんか、ゲームの世界やって！」

酒臭い息から逃れつつ言い訳を言った稲本は、一同の視線が自分に注がれている事に気付いた。

「稲本！冗談なしやで。何か知ってるんか？あの荷物とあの指示は流石に不気味やで。」

俺んとこなんか、嫁さんや子供や嫁さんの実家に、ワクチン止めさすので離婚騒動やねんど！

ただでさえ、毎日地雷源を歩いてるみたいな家庭状況やねんからな。

「

倉本宗一郎が呆れ顔で言い放った。

「俺も、4年ぶりに出来た彼女、看護師なんだけど、一生元気でいて欲しいから、なんて言われて断れかったんだ。イナには悪いと思ったけど……」

平山 一が頭を掻きながらペコリと頭を下げた。

「いやゝ悪い。この通り謝る。」

稲本はテーブルの上で上半身土下座の形で謝った。

「会社の先輩から妙な話しをされたもんで……何となく嫌な感じでさ。まあ、『命の水』があれば助かると思って、その後バタバタしてて事情連絡もなかったし……すまん。」

「すまんじゃあかんわ。その妙な話しとやらを聞かせてもらわな、

みんな納得せえへんで！」

本田が逃がすものかと、たたみかけようとした。

その時、ガヤガヤとしていた居酒屋の雰囲気がザワザワした雰囲気に変わり始めた。

「おい！携帯のワンセグで他のチャンネル見てみい！」

「なんやこれ？新種の宣伝やるか？むっちゃ、キモイで、よく放送出来るよな。」

あちらこちらから、囁きではない声が漏れ始めていた。

「おい！何か変な感じやで」

平山が辺りをキョロキョロしながら不安げに言った。

倉本が、ザワザワしている周りのテーブルにならない、携帯電話を操作しながら、ワンセグテレビを立ち上げた、最初に映し出された画面を見て、思わず立ち上がってしまいテーブルにある、数々の皿やジョッキグラスの幾つかが、床に落ちて粉々に弾け飛んだ。

「……………！？」

倉本の突然の行動にびっくりしながらも、阿部と川口が倉本の左右から、携帯の画面を覗き込んだ。

画面には、逃げ惑う人々とそれを覚束ない足取りで追いかける、血だらけで見るからに死人そのものがところ狭しと歩き回っていた。

阿鼻叫喚の音声から、リポーターらしき人物の音声が入り、画面が女性に切り替わった。

リポーターは車の助手席にすわり話し始めていた。後部座席からカメラマンが撮影しているらしかった。

「2時間程前に、ここ東京のサラリーマンの憩いの場所、新橋で原因不明の事態が発生しているとのことで、我々取材班は来ております。」

ドン！と音がして、車のフロントガラスに血だらけの手が現れて、そのまま、何度もフロントガラスを叩き始めた。

「きゃあああああああ！いやあああああ！もういやあああああー！ー。」

必死に理性を保っていたリポーターの理性が吹き飛んだ。

「林さん！く・車だして！」

運転席の人物の左手を掴みブンブンと振りながらリポーターは死に物狂いで

「早く！早く！私達も食べられちゃう！早く！」と叫び続けていた。

「林！久美ちゃんを黙らせろ！黙らなかつたらハンカチでも口ん中に突っ込め。」

画面が荒々しく揺れ動き、運転席と助手席の間が映し出されて、激

しくもみ合う手と音が続いた。

「うっ・うっ」

と言う声と、ダッシュボードを蹴り上げているらしい音の中。

「視聴者の皆さん。」

うわずった、震えた男性の声が語り始めた。

「カメラマンの高槻です。リポーターがご覧の状態なので、私が喋ります。難しいことはわかっておりません。」

一旦言葉が途切れて、大きく唾を飲み込む音がした。

「人が襲われてます！襲っているのも人です！但し、襲っている人間は、一様に、大怪我をしているか、死者としか思えない者ばかりです！まるで、映画のゾンビ、アンデットと同じような状態です！決して、ドッキリ番組や映画の宣伝ではありません！」

「今、新橋で起こっている事態をライブでお伝えしています！」

我々、取材班のメンバーにも噛まれた者がおります。手当てのため、我々は現場を放棄しますが、視聴者の方々！これは事実だと信じて下さい！

局からの連絡では、都内各所、いや全国で発生しているとのことです！以上です。」

「林！出せ。氏家を病院に連れ行くぞ！……構わんゾンビなんざあ挽回ちまえ！」

画面は突然、スタジオに切り替り真っ青な男性アナウンサーが映っていた。

「マ・マジかよ！？これ？」

画面の覗き込んでいた、阿部は力なく椅子に座り込んだ。

川口は声もでていない。

「みんな！出るぞ！」

倉本が一同に言い放ち、伝票を持って、レジに急いだ。

「まだ、注文の品来てないぜ！俺のカラアゲがまだ来てないんだってば！」

ズンズンと歩く倉本に川口がフラフラと着いていく背中越しに中澤が文句を言った。

「つよし……ゾンビだ。街ん中じゅう、ゾンビがうようよしてんだ。もう終わりや。」

力なく椅子に座ったままの阿部が唸った。

それを聞いた本田が、隣のテーブルで、ブルブルと震えながら、携帯の画面を食い入るように視ている、OLから携帯電話をむしり取り、画面を数秒眺めて

「ヤバいぜ。阿部、林、中澤、稲本。倉本を追っかけるぞ！早くしろ！」

本田が、残ったメンバーの尻を叩いて、出口に向かった。レジ回りは、支払いを済ませて帰るとする連中で満杯状態であった。

「倉本！出るぞ！これレジに無理やり置いとけ！」

万札を1枚。倉本に押しつけて、本田はラッセル車なみに人混みを掻き分けて進んで行った。

倉本も、伝票と万札をレジの横に放り投げ、川口を引っ張り本田を追った。

「お・お客様。会計がまだ……お釣りが……」

伝票と札を眺めて、店員がうろたえていた。

エレベーター前に全員が到着したところで本田が誰になくに言った。

「わからんけど、なかりヤバいんじゃないか？」

「兎に角、エレベーターで1階に！」

平山がエレベーターのスイッチを触とした瞬間に、倉本が平山の腕を捕まえた。

「待て！エレベーターの中から出て来たらどうする？本田、お前、この手のゲーマーだろ？どうなんだ？」

「倉本……。ゲームと現実の違いわ。だって俺、手震えてるし……」

本田が自身の両手を凝視していた。

「わかった！なら、試合と一緒に。俺が仕切るってことでいいな？
……本田は、意見があれば頼む。お前の知識は多分役に立つと思う。ちなみに、武器として最適な条件は？考えられるだけ挙げてくれ。」

全員を見渡ししながら、異論が無いことを確認し倉本は通路の左右を注視した。

あまり、大きくない雑居ビルの居酒屋である。通路のあちこちに、色々なものが雑然と積み上げられていた。

倉本はしばし考えを巡らせて、一同に指示を出し始めた。

「エレベーターはヤバそうだから、階段で行く。3階だから外までは僅かだしな。武器になりそうな物を捜すぞ！」

「のんびり探してる間はないからな！その内店からどんどん客が引きはじめる！そうになると、間違いなくエレベーターが作動するぞ！本田！武器の目安は決まったか？」

意外と冷静に倉本は指示を出していた。

「わからへんけど…バットとか……」

なかなか、思考が一つにならない状態で本田は答えた。

「こんなところにバットなんかあるかぁ！」

中澤が、通路にある荷物を片っ端から、荒らしながら怒鳴った。

「おい！ここ。倉本！こっち来てくれ！」

稲本がロッカーを開けながら倉本を呼んだ。

ロッカーの前に来た倉本は、小さく口笛を鳴らし

「イナ！でかした！」

と嬉しそうな声を出した。ロッカーには、店舗の防犯用なのか、2本の木刀があった。

一振りには普通の木刀。もう一振りは、鉄の芯が入った素振り用の木刀だった。

「本田！」

倉本は叫びながら、本田に木刀を放った。

木刀を握った本田は片手でブン・ブンと2回振りごたえを確認して、ニヤリと笑った。

「集合！」

倉本が一同を集めて、それぞれの品を確認した。

中澤と阿部が木製のモップ。

稲本はステンレスの物干し竿。

平山と川口は何も見つけられなかったようだ。

しばし、倉本は考え、平山と川口に、空のビールケースを持たせた。

「よし！降りるぞ！

先頭は平山！ビールケースを楯にしてゾンビを威嚇！平山のバックアップは本田！続いて、阿部、俺、中澤、稲本、川口。

川口と稲本は、後方注意な！役割は平山と本田の関係で！阿部と中澤は、漏れた奴の相手！質問は？」

倉本の指示に呆気にとられた一同は……店の入り口から、ガヤガヤと人が流れ出るのに触発されたかのように、階段の入り口に向かって走り出した。

防火扉を兼用した入り口の前で

「中澤、扉、ゆっくりと開けくれ。本田と俺が入るから」

倉本は本田をチラリと見た。

本田は既に、木刀で突きを入れられる体制にして構えながら

「俺が最初に行く」

中澤が恐る恐る手前開きの扉をゆっくりと開けていった、丁度、人1人分開いた途端に本田が 躊躇なく扉に飛び込んだ。

本田が扉の外で構える時間を見越して、3秒ほどして倉本が飛び込

んだ。

10秒程して、倉本が顔を出して、一同を手招きし、全員が階段の踊り場に揃った。

人差し指を口元に当てて

「出来るだけ静かにな。音はたてるなよ。」

一同は階段を降り始めた。出来るだけ音をたてないようにしながらも出来るだけ早く降りようとしていた。

先頭の2人が2階の踊り場についた時に、本田が平山の肩を叩き止まるように指示し、後ろを振り向き倉本に来てくれと、手招きをした。

「どうした？」

本田の横まで降りて来た倉本は小声で尋ねた。

本田は、踊り場にある窓と2階の店舗スペースを隔てた防火扉を順に指差して

「条件が全然見えねえってのはヤバくないか？まず、外の様子を窓から確認せえへんか？」

「そつやな。確かに外が安全とは言えへんしな。」

倉本は後ろを振り向いて、階段の途中にいる仲間に踊り場に降りてくるように指示した。

「何？」

「どないしたん？」

踊り場に揃ったメンバーは小声で口々に、倉本と本田に質問を浴びせた。

本田が説明しようとした瞬間。

「携帯。通じねえぞ！」

平山が唸った。

一同は、それぞれに携帯電話を引っ張り出し、アンテナ表示を確認して、思い思いに電話をかけ始めた。

「呼び出し音だけや」

「110番も呼び出し音だけや」

「じ・地震の時みたいな、一時的に集中してるだけやんな？」

平山は真っ青な顔で、メンバーを見渡し同意を求めた。

「みんな、どこの携帯使ってる？」

中澤が全員の携帯を覗き込んで

「全滅かよ！」

と天井を仰いだ。

「よう！そんなことは後回しで、まずは安全を確保してから考えようぜ、扉がガンガン叩かれてるし」

本田が馬鹿らしそうに蹴散らす言い方をしたことが気に入らず平山が本田に突っかった。

「お前は心配する人おらんのか！」

「離せ！」

本田がスーツの襟を掴んでいる平山を突き飛ばし

「心配ってか？電話したからって助けれんか？それより、まずここから出ることやろが！」

扉の向こうからは更に叫び声と叩かれる音が増していった。

倉本と本田がドンドンと叩かれる扉に近づき耳を済ますと、間違いなく助けを求める声がした。

とつさに、本田がドアノブを引いた…………

「あかへん！？扉、開かへん」

何度もドアノブを回しても開かなかった。

「！」

「どけ！変われ。一気に開けるからな。本田頼むぞ！」

倉本が扉に飛びつき、ドアノブの開閉ボタンを解除して一気に扉を押した。

もう一つの始まり

「なあ？由紀。ここの時給って高すぎへん？普通のキャバの倍近やで？怪しい仕事やったらどないしょー？」

奈緒美が、派手な衣装に身を包み、厚化粧をしながら同じように厚化粧をしている、金本由紀に鏡越しに話しかけた。

「倍って何で知ってんの？奈緒ってキャバでバイトしたことあるん？」

自分でしたケバケバしい化粧にウンザリし、由紀は奈緒美の化粧をみながら

（そもそも、キャバクラで年誤魔化してバイトをせなあかん羽目になったんは、全ては奈緒美のせいやん。

あんたは、軟派されても適当にあしらうこと出来るかもしれへんけど、久美がそんなん出来るはずないやん。案の定だまされて、妊娠騒動やんか！）

「由紀イイイ。いくら私でもキャバクラでバイトなんかしたことないわ！ネットの求人サイトの時給と比べただけや！」

「しゃーないやろ！1週間で12万用意せなあかんねんで？マツクで稼げるか？」

それともアンタがあんなしょーもない男紹介したんやで、『ウリ』でもする？」

「『ウリ』なんて無理無理。出きるはずないやん！」

ケタケタと笑う奈緒美に、イラッときた由紀は奈緒美と向かい合いながら

「はつきり、言つとくけど。アンタが変な男を紹介したんが原因やで！久美は妊娠がバレたら退学やし、あそこのお父さん怖いやんか。去年も成績が落ちた言うて、フルボッコやで！先生にも言われへんで、交通事故でって、説明して納得されたくらいのフルボッコやで？原因のあんたやったら殺されるで！」

シユンとした奈緒美に、これ以上悪態をついても何の解決にもならないことにイラつきながらも、由紀は何とか気を取り直して

「まあ、スケベ親父のお酒の相手するだけなんやろ？久美のためにも1週間我慢するだけやんか！がんばろ！」

しかし、透け透けのドレスで下着丸見えやんなこの衣装、下着もスケスケやし、ほんま男は、すけべえやな！」

そこへ、店の女性店長が現れて

「お！さまになってるね！バンバンかせいでね！1週間の体験入店だけでなく長く来てくれると助かるわ。体験入店期間がすんで、本採用の時には身分証持ってきてね！」

そう、二人がこの店を選んだのは、1日最低1万円保障。体験入店の1週間は身分証いらず。の条件があつたからである。なにせ、二人とも高校2年生なのだ。

ユーロビートのけたたましい音が流れる店内への入り口に案内され

ながら

「まずは、みんなで店の中のカウンターの上を腰をフリフリしながら歩いてね。」

常連さんで新人好きのお客様に話しは通ってるから、カウンターを2周したら11番のボックス席に行くのよ。」

「あつ！アミちゃん。この二人体入なの。アミちゃんの後ろにつかせるから、11番に連れ行つて10分程レクチャーしてあげてね。クルミちゃんとツンデレちゃんだから」

「？ち、ちよつとツンデレちゃんってどっちですか」

由紀は店長に詰めよつた。

「ハイ、ハイ。行進が始まるよ。あたしに付いてきな！ツンデレちゃん。」

由紀の頭を撫で撫でし、アミは店内に入つていった。

（もう！なんで私がツンデレちゃんなのよ！）

膨れ面で由紀が続き、その後ろから笑いをこらえた奈緒美が続いた。

喧騒と拍手に包まれた店内に一歩足を踏み入れた瞬間に、由紀は身体が強張つて、歩を進めること出来なかった。

脂ぎったオヤジから爽やか系のイケメンまで……30人近い男どもが、カウンターの回りで、低い椅子に腰掛けている。

そこを、ミニスカートをヒラヒラさせながら、キャバ嬢が練り歩いている。

早い話しが、パンチラ見学である。しかも、店から支給された下着は、うつすらと透けたＴバックである。由紀にとっては、下半身裸で歩く気分と変わりわなかった。

付いてこない由紀に気づき、アミがカウンターから戻ってきて、由紀の手を強引に引いていった。アミに引きづられ、由紀は顔を真っ赤にしながらカウンターの upper を歩いていった。

（信じられへん。見せ物やんか？ヤダ！Ｔバック下から見たらお尻丸出しやん！ええええええ！やだ、あの人のスカートの中におっさんが顔を突っ込んでるやん！

な・何？アミさんなんかバレーリーナみたいに片足挙げてる。あれって、大事なところも丸見えちゃうん？）

「きゃっ！」

後ろで奈緒美が小さく叫んだので、由紀は思わず振り返った。

奈緒美は右手に千円札を数枚握らされ。

スカートの中にオヤジが頭を突っ込んでいた。

奈緒美の顔を見れば、ただ見られているだけではないことは一目瞭然だった。

何とか、2周目が終わりアミにBOX席に連れて行かれる時に

「あなた達、いくつ？」

とアミに悪戯っぽく耳打ちされた。

二人はアミに連れられて11番BOX席に向かった。BOX席には今の喧騒に参加せずに、のんびりと酒を飲んでいる30台半ばの比較的体格のいい2人組みが座っていた。

「！」

（やばい！3年の体育担当の宮根やん。しっかし生活指導のくせして自分はキャバ通いかよ！信じらんない！気づかれるかな？どうしよう？）

由紀が悩んでいる間に、一同はBOX席に到着してしまい、アミはさっさと席に座ってしまった。

「クルミちゃん、ツンデレちゃん、ここ、ここ、ツンデレちゃんはスーツの方にクルミちゃんはもう一人の方の横に座ってね。」

それぞれの挨拶が終わったところで、アミが口を開いた。

「二人とも体験入店だから、手荒い事したら駄目ですよ。店長が期待している新人さんですから、お手柔らかにお願いしますね。」

まだ、店のシステムも知らないんで、お二人から教えてあげて下さいね。さあ、さあ、クルミちゃん、ツンデレちゃん、お二人にお酒注いで」

ここからは、良い子の皆さんにはお伝え出来ませんので。結果だけをお伝えします。

バッチーリーーンと大きな音がした。由紀がBOXの中でサラリーマンを、思いつき張り倒した。

「どすけべえ！気安く触るなボケエ！我慢にも限界があるわー！」

思いつき殴ったにも係わらず、殴られたサラリーマンは嬉しそうに

「怒ったところも可愛いね！まさしくツンデレちゃんだ。」

あきれた由紀はグラスを持ち、サラリーマンの頭から水割りをぶっ掛けた。

突然、サラリーマンは我に返ったように

「てめえ。このアマ！プレイ気分でやさしくしてやってれば図にのりやがって、兄貴、そんなMっ娘、放っておいて、こいつに焼きいれようぜ！」

既に、生娘ではない奈緒美は、宮根に身体中を愛撫されてへろへろになっていた。

「お嬢ちゃん？俺たちの事はな〜んも聞いてへんのか？組連れていっただろかあ〜」

首を少し斜めにし、立ち上りながら由紀の顔を舐めるように見て、宮根は、机をひっくり返して由紀ににじり寄った。そこにあわてて女店長が割って入ってきた。

「すみません、すみません。まだまだ、新人なんで……
お客さ〜ん、お店で筋の話を持ち出すのは……ちよつと

こまるんですよね。

ほら、ツンデレちゃんも、組事務所に連れて行かれたら困るでしょ？早く謝って、ほら。」

最初は、散々身体中を虫のような指でまさぐられ続けられ、キレた状態で騒ぎを起こしてしまっただが、久美のこと、お金のこと、自分の学校のことなど、どうしようかと途方にくれていた由紀であったが店長の台詞を聞いて、話しの流れに合点がいった。

（宮根の奴、組〃やくざと聞き間違えられて、そのまま勘違いをつきとおしとんねんわ。

なら、起死回生の一発をお見舞いしたるか！）

「店長、かまへんで。おっさん事務所に連れてつてか。

なあ！組長さんて女の人ちゃう？名前は鈴木悦子やんなあ？（校長先生）そんで、若頭さんが斉藤一郎やったっけ？（教頭先生）兄貴分いやアネさんは、宮根智子（宮根の妻であり同高3年学年主任）やんなあ。」

「！・・・・・・・・・・・・・・・・」

ギョツとした、宮根は、由紀が顔見知りかどうかを必死に見極めようとした。

考えれば、学校ではすっぴんの超優等生で生徒副会長の由紀と今のスケスケ衣装の由紀が同一人物と気づくはずはないのである。（奈緒美は、府外の私女子高）

由紀は、にやりとウィンクして勝ち誇った顔で、宮根に最後通達をした。

「どないするん？まあ、帰るんやったら見逃したるわ。代金だけは払ろてつてや！、修理代もな！」

宮根とその弟は、捨て台詞を吐きながら席を出て行った。

女店長は小娘に追い出された格好の宮根にへばりつき、通常の料金以外に修理費など、高額な額面を請求し、両名の財布の中身を残らず搾り取った。

疲れ果てて二人が控え室に戻ると、そこには湯気のたつ珈琲を啜っているアミの姿があった。

「アミさん！」

アミの顔を見た途端に、由紀の張り詰めていた気持ちが一気に崩れ、ポロポロと涙が頬を伝った。アミは、由紀を抱きかかえてやさしくこう言った。

「高校生がこんなところでバイトは関心せえへんな。事情があるのかもしれないけど、今日でおしまいにしいや。」

クルミちゃんはおぼこやないみたいやからかまわんへんけど、あんなに逝かされとったら身いもたへんでえ」

奈緒美にも笑顔を向けて「メッ！」と言だけ言った。

そこへ、宮根兄弟から大金をせしめた店長が部屋に入ってきた。

「おった、おった。もうあんたらは……。アミちゃんもアミちゃんやで、助けに入ってくれると思っとなんやけど？どないした

ん？」

「少しは、お仕置きせなあかんやる店長。ちょっとは怖い思いさせなあかんって。まだ、事情も聞いてへんしな。」

由紀と奈緒美に事情を聞き、店長は黙って12万円を手渡してくれた。

「こんなん、もらわれへん。」

由紀は遠慮したが……

「どうせ、さっきのいかさまヤクザ者の金や！正規代金と修理代はもらってあるから心配しいな。」

どうしても受取にくいんやったら、さっきの客の素、。知り合いなんやろ？教えてくれたらいいわ。でどう？」

宮根の素性を説明しているうちに、店の方から叫び声や怒声が聞こえ始めた。

「またかいな。今日は揉め事の多い日やな！」

ブツブツと文句を言いながら、店長が店に戻っていった。由紀と奈緒美はアミに言われ、自分の荷物を整理し、着替えの準備をした。

バン！と扉が開き、血相を変えた、店長と料理人が部屋に飛び込んできた。

「閉めて！閉めて！」

店長が息絶え絶えにドアを閉めるように指示し、事情のわからないままにアミがドアを閉めた途端に、料理人の岡崎が、打ち合わせ用の机などでドアにバリケードを作り始めた。

「岡ちゃん？どないしたん？」

アミの問いかけに

「ゾンビや！ゾンビ！ゾンビが店ん中に現れて、客や嬢らを喰ツとるんや！店長！、こっちは塞いだからそっちのドアから出よ！早くせんと、ゾンビが店からあふれよるで」

よく見れば岡崎の白衣は血まみれで、両手には大きな包丁が握られていた。あわてて、5人は違う扉から出てエレベーターホールに向かった。途中で、アミは消化栓にすえつけられた大型の斧を見つけ、岡崎の包丁の柄で、保管されていた強化ガラスを叩き割り斧を身構えた。

だが大きなガラスの割れる音は、必然的にゾンビを呼び出す結果となった。

店から、派手な衣装を血まみれにしたキャバ嬢や、片腕のないサラリーマンが、覚束ない歩き方でノロノロと出てきた。

「階段に向かえ！」

岡崎は女性に指示し、ゾンビに対峙するように立ちふさがり包丁を振りかざせるように身構えた。

由紀と奈緒美が階段の扉にたどり着いたが、鍵が閉まっているのか押しても引いてもビクともしない。アミが追いつき、扉をドンドンと叩き、助けを求めた。

同時に、最初のゾンビが岡崎の包丁が届く範囲に到達した。岡崎は躊躇せずに包丁を横になぎった。

最初のゾンビは、目の上から頭の部分を岡崎に切り取られて、永遠の死を迎えた。岡崎は勇猛果敢に、左右の包丁を振り回し、10体ほどのゾンビを切り裂いていたが、振り回す包丁の勢いは徐々に弱まりとうとう右手をゾンビに噛み付かれてしまった。

「いてええええー！ー！。クソツタレ、離さんかい！」

ゾンビを蹴り飛ばしたが、岡崎は右手の肉もごっそりを喰いちぎられ、右手の包丁は音を立てて床に落ちた。

しかし、岡崎は痛みで覚醒したのか、残る左手の包丁を信じられない速さと力でゾンビに打ち付けていった。

しかし、所詮は1人。数分でゾンビに覆いかぶされるように飲み込まれていった。

「開いた？どう？」

岡崎の落とした包丁を拾い上げて、店長はアミに声をかけた。

「駄目！鍵がかかっているみたい。」

必死にドアノブをガチャガチャとまわしながらアミは必死にドアを

けりつけた。

「アミ！高校生。頼んだわよ！」

アミに一声かけて、店長は包丁を握りなおしてゾンビに立ち向かった。

（たとえ、1分でも・・・彼女達を助けないと！）

アミが最後と思いドアを蹴り上げようとした瞬間にドアが迫るよう
に開かれ、サラリーマンが木刀片手に飛び出してきた。3人の女性
を庇うようにし

「入れ！」

「こんだだけか？」

アミは高校生の2人をドアの中に押しこみながら

「もう一人。」

と叫び、店長の方を見た。一瞬遅かった、覚悟を決めた店長は包丁
を振り回しながら、ゾンビの群れに突っ込んでいった。

（孝之君。ごめんね、先生が・・・先生が、いじめに立ち向かっ
てあげられなかったから、君は一人で苦しんで逝ってしまったんで
しょ。もう私は逃げないわよ。自分の命と引き換えにしても彼女達
は守るわ。孝之君、先生に力を貸して、お願い。お願い。）

女の細腕ながら数体のゾンビを倒す事は出来たが、あっという間に
店長はゾンビの群れに飲み込まれた。

「ちきしょう！もう10秒早くあけてたら！」

悔やむ本田を倉本は階段に押しこみ、扉を閉めた。

脱出（前書き）

無謀な3作品 同時連載・・・・・・・・どうなることやら

脱出

本田が飛び出し、続いて倉本が飛び出したと思った途端に、派手な衣装を身に着けた女性が踊り場に転がりこみ、続いてスポーツバックスが2個放りこまれた。

転がりこんだ拍子に女性のミニスカートはまくれ上がり、二人ともお尻丸出し状態で突っ伏していた。

目のやり場に困り果てて、中澤と川口がそれぞれのコートを2名の女性にそっとかけた。

続いて同じような衣装をまとった大人の女性が扉を潜り抜け、魂が抜けたように床にヘタリこんだ。

本田と倉本が扉を潜りぬけると途端に

「イナ、阿部、直ぐに、その廃ロッカーで扉を塞いで！川口と中澤は3階の扉の内ロックを閉めてきてくれ。」

名々が瞬時に行動を起こした。

「倉本、こ、このロッカー何が入ってんだか？くそ、重てえぞ。平山、手伝え！」

稲本の要請に、平山と本田が駆け寄り、4人がかりでロッカーを動かして扉を封鎖した。扉はガンガンと叩かれて続いていた。

「3階の扉はロックしてきたぜ。ついでに、気休めだけど回りのゴチャゴチャした物、積み上げといたぜ。」

肩で息をしながら、中澤と川口が戻ってきた。

階段の窓から外の様子を確認していた倉本が、窓から離れて、首を軽く窓に向けて振った。

メンバーが交互に窓から外の様子を確認した。

「見える範囲で10～15体くらいだよな？このビルってどんな造りだっけ？正面玄関ってどんな感じやった？」

中澤がメンバーに問いかけた。誰一人として正確に覚えている者はいなかった。

「あゝ」

アミが遠慮気味に倉本達に声をかけた。

「あ！ごめん。ごめん。挨拶もまだだったね。それより君、この従業員だよな？ちよつと教えてくれる？」

挨拶もそこそこに、アミは倉本達の輪の中でビルやビル周辺を説明していた。

「なるほど、階段をくだると1階が表玄関で道路に面したEVがあるビルの正面ね。そのEV横に出るんやな。扉はエレベータの裏？、ということは扉を出たら右方向にEVを回るようにして出るんやね。地下は駐車場？。行ったことはない？ぞうか。駐車場から人の出

入りは出来る厨？房の人が言ってた？

駐車場の出口、そう、車の出るところは、EVをはさんで階段と逆方向？。つまり、階段は御堂筋側、駐車場は堺筋側ということやね。

「

知りたい情報を入手した倉本は、中澤と川口に女性に男性陣のコートなどを渡し、外に出る防寒対策を指示し、阿部、平山には階段の上下の見張りを指示し、本田と稲本を呼び脱出経路を検討し始めた。

「人の数から言っても、堺筋側がベストちゃうか？3〜4ブロック北に上がれば、警察署（南署）があるぜ」稲本

「いや、この手のパニックだと、生存者は警察を頼るから逆にゾンビがよってこうへんか」本田

「堺筋側にしよう。まず、駐車場の出口なら最低でも3〜4メートルはあるだろう。EV横だと、2名横並びで通るのが精一杯や。

駐車場なら、最悪分散して走り抜けるやろ、それと、堺筋をそのまま東方向にいけば、上本町とかのオフィス街やし、人は少ないんと違うかな？警察は状況次第で考えたらええんちゃうか？」倉本

「それより、早くビルを出たほうが懸命やぞ」倉本

2階と3階の踊り場で見張っていた阿部が小さく口笛を鳴らして全員に注意を促した。

上のほうから、何かの音がしたと思った途端に、階段を転げ落ちるような音に変わった。一気に全員が2階に集合し、倉本の指示を待った。

「ももとの陣形で行くぞ。女性陣は木刀を持っている僕とあいつ

の間にいてください。

地下駐車場から出るぞ、最悪の場合は駐車場からは個別に逃走になるかも知れへん。地下についたら、赤のドレスの方は稲本。グリーンのドレスの方は本田。ピンクのドレスの方は私と行動してください。イナ、お前はこの女性が持つてきた斧もつてくれ。」

倉本が指示するや否や、男性陣が一齐に行動を起こしたが、女性陣はわけがわからずウロウロするだけであった。

本田が1人の女性の手を引いて、階段を降り出して他の女性も習ったように後を追った。

（この娘、キャバ嬢やんな？しかし、手なんかぶよぶよやんけ。こんな瑞々しいキャバ嬢の手なんか知らんわ。てか、化粧濃いけどめっちゃ若いんちゃうか？高校生やったりしてな）

木刀と言う武器を手にして、余裕綽々の本田は自分が引き連れる女性にそんな印象を感じていた。

何の問題もなく1階に達し、念のために1階の扉にも

「ここをロックしたら、この扉の向こうで助けを求めている人を遮断するんやんな？せやけど、階段側にロックって変なビルやな」

先頭の平山がボソッと喋りながらロックをかけた。

また、上の方の階で人が転げ落ちる音がして、一同は黙って地下への階段を下っていった。一同は、地下1階に到着した。

「さあ、こっからが本番やで！」

本田は、木刀が手から離れないように、木刀を握った右手をハンカチで結わえていた。

小さく鋭い口笛がなり、一同は後方を振り返った。稲本が何かの合図をよこしていた。

倉本と本田が自分たちが呼ばれているだろうと判断し、扉から離れて、1階への登り口に近づいた。

「音の原因がわかったわ。あんまり顔出さずに階段覗いてみ」

稲本が階段を顎で差した。

本田が、顔を少しだけ階段に出すと、目が合ってしまった。と、同時に叫びかけたところを稲本がタオルで無理やり口をふさいだ。

両目とも真っ白に白濁しているのに、見られているような気になった。口が自由になった途端に、興奮しながら

「お前！あんなん見てよう叫び声ださんかったなあ」

「いや、何となく予感してたんや。窓から見たゾンビ、かなりフラフラと歩いとったやろ？多分あいつら、階段ようおりへんで、せやから転げ落ちとるんや」

稲本が喋り終わらない内に、また激しい音がして、足元にゾンビが転げ落ちてきた。

突然のことで、稲本も本田も平山も身動きが出来ない間に、ゾンビ

は誰かの足を掴もうと這い出した。

ドスッ　と音がした途端にゾンビの後頭部に木刀が突き刺さっていた。

無言で、倉本が木刀をゾンビに突きたてていた。

「案外と脆いな。人の頭蓋骨は……」

ゾンビを軽く蹴りとばして、動かないことを確認し、ことさら、うわずるわけでもなく平然と言い放ち、他にいないかと階段を数段登って確認をし始めた。

「一体だけみたいやな。映画や小説と同じや。頭、潰したら死にやるわ」

あまりの手際良さに、啞然とする3人を小突きながら

「しゃきつとせいや！」

と言い放ち、扉に向けて歩いていった。

「く・倉本。お前、最強やなあ」

本田が呆れ顔で言いながら、他の2人と倉本の後を追った。

再度、扉の前に集まったメンバーを見渡しながら

「さあ、いよいよだ。この扉の先はもう建物内ちゃうから、360度回りを注意してや

それと、雑居ビルやけど警備員がいてもおかしいのに、見かけんやろ？

地下に警備員室がある可能性大やで、ほんで、警備員がゾンビという可能性もあるから、迂闊にちかづくなよ。2メートル以内に近づかないこと！わかったかな？

阿部、悪いけど扉頼むわ。本田、さっきみたいに気イ抜いてたらアカンで！」

阿部が扉を開けた。開けられ扉の外はありがたいことに、蛍光灯が灯されており視界が確保出来そうだった。

「真打ちは後から来てや」

本田が扉に向かって飛び出した。

地下駐車場には、本田からみて右斜め後方に警備員室らしき部屋と右斜め前方と左斜め前方に1台ずつ車が止められていた。

「大丈夫そ……」

振り返りかけた本田の右手からいきなりゾンビが襲ってきて、本田ともみ合うように地面に倒れこんだ。

「やばっ！こいつすげえ力や。」

木刀を右手に結わえたことが裏目にでて、本田は右手が自由に使えずに木刀をかざした状態で何とか突っ張るように支えるのが精一杯であった。馬乗りのゾンビは涎を垂らしながら必死に噛みつきつづけていた。

「ノブ！ゾンビの頭もうちよつと上げる。」

声が聞こえたか否やのタイミングで、倉本がゾンビの頭をサッカーボールのように蹴り上げた。

ゾンビの首があらぬ方向に曲がり、動きが止まった。

「イナ、阿部！周辺確認！俺は出口見てくる。」

稲本と阿部がおっかなびつくりと駐車場に出てきて、警備員室の方に向かいかけた時、扉の死角の暗がりから、警備員姿のゾンビが現れた。

「で・であゝ」

阿部は慌てすぎて、モップを握り直とした落としてしまった。

「や・やべー」

阿部は助けを求めるように本田の方を見たが、のしかかられた大柄の警備員ゾンビの下から抜け出すのに悪戦苦闘していた。

「ふんっん！」

気合いのこもったかけ声とともに、阿部に迫り来るゾンビの頭が数メートル離れたところを転がっていた。

ゾンビの倒れた先には、斧を肩にかけた、稲本が得意げにしていた。

「サンキュー、イナ。」

そう言いながら、阿部はモップを拾い上げて、本田を助けに行った。本田と阿部、稲本が扉の向こうの仲間を駐車場に呼び入れている中、倉本が戻ってきて、大柄の警備員の持ち物を漁りながら。

「入り口付近にはあんましおらへんけど、通りにはヤバいほどおるわ。よっしゃ！特殊警棒とフラッシュライトと折り畳みナイフ、ゲツトや」

ゾンビの死体から、物資を漁っている倉本に一同は引きつっていた。

「倉本、特殊警棒とフラッシュライトあったわ！」

本田も、首だけゾンビの物資を漁っていたようだ。

「川口、平山、阿部、本田で見張りと扉閉め頼むわ。」

「中澤は女性陣な」

「イナ、警備員室漁りに行くで。」

矢継ぎ早に指示し倉本は警備員室へ向かった。警備員室に到着した倉本は、稲本に向かい

「探しもんは、鈍器系の武器と懐中電灯。それと、飲みもん、食いもん、鞆かバック

電池、地図、ノートパソコン。それと、車が止めてあるやろ、その車種の鍵もな」

倉本と稲本が警備員室で探しものをしている間に本田達はビルとの扉を閉めて、手近な重みのある箱だの潰れた廃棄機などをバリケード代わりに積み上げた。

「しかし、倉本ってあんなんやつたか？なんか、雰囲気違わへんか？」

本田の問いかけに、中澤が答えた。

「あいつ、結婚してから大変らしいで、元々気がええやろ。新婚で嫁さんを甘やかして、そのまま、嫁さんの実家にのつとられてるらしいわ。」

「そんなんで、あんだけかわるか？なんか、この状況を楽しんでるみたいやんな？」

川口も不思議そうに倉本に感じる疑問を問いかけていた。

「倉本、ここの警備員、野球が好きみたいやで、バットが3本もあるわ。」

バットを机におきながら、何気に机の引き出しをあけながら稲本が倉本に話しかけていた。

「せやけど、お前、映画の主人公なみやな。なんか、先々が分かってるみたいにみんなに指示だしてるやん。どないかしたんか？」

「しょうもないこと喋ってる暇あったら、手動かせ。おつ、菓子結構あるぞ。かばんはないけど頑丈そうな紙袋があるな」

しばらくして、倉本と稲本が警備員室から戻ってきた。

「バット3本。懐中電灯2本。お菓子紙袋1杯。大型カッターナイフ2本。ペーパーナイフ1本。果物ナイフ1本。ドライバーセット。車の鍵2本。車用の携帯充電器2個。こんだけが収穫やったわ。」

車の鍵を1本ずつ、川口と平山になげて

「鍵が合ってるか見てきてくれるか？あつてれば、ガソリンの量も見えてな」

集められた物資の前で腕組みをしながら倉本は何かを考えている様子だった。

川口と平山が戻ってきて、車は2台ともほぼ満タンであることが分かった。

「旧型デリカとステップワゴンか……」倉本はつぶやいた。

「よし」

倉本は決断をしたように自分自身にうなずいた。全員を集めて、今後の方向を説明した。

「まずは、車が2台あるので、2グループに分けたいと思う。女性陣は分けるわけにはいけないので1グループとする。

女性陣と組む場合は半数が女性となるので、必然的にチームとしての戦闘力が落ちる。

俺が意見を言う前に、そのチームに入る気がある奴が居れば言ってくれるとたすかるんだが……」

あからさまに、戦闘力が落ちる。死の確立があがるといわれて立候補する者はなかなかいなかった。

「いないみたいだな。まあ、あたりまえやわな。そんなら、俺が決めさせてもらうけど恨みっこ無しやで……」

女性陣と、本田・稲本・俺の6名がデリカ。中澤・阿部・川口・平山の4名でステップワゴン。車についてやけど、女性陣のリスク分を車で相殺していると思ってくれればいい。

デリカの方が車高が高く4WDなんで、車での突破などでは有利だと思う。その分スピードはないけどな……

次は武器。中澤班。ここは中澤がキャップな。バット3本。懐中電灯2本。それ、元々のモップとビールケース。

倉本班。木刀2本に斧1本。フラッシュライト2本。女性陣にはカッターナイフか果物ナイフを持ってもらう。

電池やお菓子は人数分け。それと、車で出るギリギリで、警備員からせしめた財布の金で、警備員室横の自販機で飲み物を購入する。先頭車両は倉本班。以上だが。文句があればこの場でたのむわ。」

「あー」

アキが女性陣を代表して質問をした。

「この先、どこにいくんですか？安全なところなんてあるの？」

「申し訳ないけど、わからへん。どないしたらええんか？さっぱり検討がつかんへん。

今、言えることは、安全な場所を探して、情報を手にいれなあかんことだけや」

「もう、かなり時間食ってるから、いい加減に出発しようぜ！」

本田の一言で、メンバーはそれぞれの配給品を車に積み込み倉本の指示で全員がトイレを済ませた。エンジンをかけ自販機の傍に止めて50本近い飲み物を購入した。

デリカは稲本が運転し、ステップワゴンは川口が運転席についた。

「イナ。天国か地獄かは知らんが、出発しよか。」

稲本は静かにアクセルを吹かして車を出発させた。稲本が車のヘッドライトを点灯しようとした時

「イナ！」

声をかけられて稲本はビクツと反応しブレーキをかけて倉本に顔を向けた。

「な・なんだよ。」

「だいぶ緊張してるけど大丈夫か？街ん中は十分明るいからヘッドライトは止めとこか。多分、ゾンビがたかってくるで。とりあえず、車ん中においてたら安全なんやから、落ちつかない。事故ったりして横転や衝突すんのが、いっちゃんヤバいからな。」

「お、おう。了解や！ほなら、行くで。」

再度、アクセルを吹かしてデリカは地下駐車場を登り、車道に躍り出た。

「……………」

「な・なんや？ビルん中のゾンビと感じがちゃうな？」

あきらかに街行く人々はゾンビには見えなかった。

「倉本！こいつら、……ほとんど無傷やで？生存者ちゃうか？」

本田が車の窓に顔をへばりつかせるように、車に向かってノロノロと近づく人を観察していた。

「わからん！せやけど、酔っ払いにしてはおかしい。………！？」

倉本は助手席に向かってくる女性を正面に見てその目に釘付けになった。

「イナ、本田。こいつら……目ん玉、白いわ。黒目があらへん。目ん玉、白濁しとる。何があってもドア開いたらアカンで。」

「倉本！ヤバイ。中澤達が……」

稲本が叫んだ。

中澤車

「中澤、外にいてる人達誰も怪我してへんで。」

歩くより遅いスピードをコントロールしながら、川口はキョロキョロとすれ違う人々を見ていた。

「せやけど、酔っ払いみたいに足取りは覚束いてないな。みんな同じ感じやで」

阿部も窓から外を覗きながら言った。

彼等は、ゾンビⅡ傷だらけね死者としか認識がなかった。

「まあ、倉本らが動かん限りは、黙ってついていくしかないやろ。」

中澤も、外を眺める目を離さずに答えた。

その時、道の曲がり角から女性が飛び出したてきて、中澤達の車を見つけて助けを叫んでいた。

周りから、覚束ない足取りの人々がその女性に近づきつつあり、女性はやがて絶叫していた。

ガチャリとドアがあき、バットを手にした阿部が外に飛び出した。

「助けるぞ！」

中澤が止める間もなく、阿部は脱兎のごとく女性に近づき

「落ちついて、助けにきたから。」

怖がらせないように声をかけて近づくと、逆方向からも酔っ払いが近づいてきた。

「おっさん！周り見張っててな」

酔っ払いに声をかけて、バットと置き女性を落ち着かせようと声をかけた

「クソっ！何やってんだあいつは！平山来い！」

阿部を追いかけて、中澤と平山がバットを手に車から降りた。

中澤は一直線に阿部に向かったが、平山は車の斜め後方から近づく人影を不審に思い、そちらに身体を向けた。

「大丈夫！大丈夫！ほら何も持ってへんやろ！」

阿部は、自分に害がないことをPRするように、大袈裟に両手を広げて、何も持っていないことを強調した。

安心したのか、叫ばなくなった女性の肩に手を添えた時、その阿部の手を酔っ払いがきつく掴んだ。

「おっさん！冗談やってる場合ちゃうで……」

酔っ払いを睨みつけようと顔を上げた阿部は、白濁した目を持つ酔っ払いを見た瞬間に、酔っ払いと信じて疑わなかった自分を呪った。

酔っ払いは、顎が外れるかと思うくらいに口を開け、阿部の右手にかじりついた。

信じられない痛みが阿部を襲った。

「うがああああ」

そこに、中澤が突入し、渾身の力でバットを酔っ払いの側頭部にヒットさせ酔っ払いが吹き飛んだ。

「ざあまあみる！」

振り向きながら、地面をのた打ちまわる阿部に

「阿部！大丈夫か。」

阿部を抱き起こしながら右腕を見た中澤はあまりの惨さに、吐き気が込み上げてきた。阿部の、右腕の肉が完全に咬み千切られていた。苦しみ悶える阿部を必死に抑え、何とか車に引きずろうとした中澤は、女性のさらなる叫び声に気づいて、女性を見た。女性は中澤の方を見て大きく目を見開いていた。見開かれた目の意味をしり、慌ててバットを握りしめて振り返りかけた中澤の首に人が咬みついてきた。一気に首の頸動脈ごと咬み千切られた。中澤は苦しむことなく、30年の生涯を終えた。

阿部と中澤が向かった方角から阿部とおぼしき叫び声が聞こえ、思わず後ろを振り返った平山は、転がり回る阿部を必死に引きずるとする中澤が後ろから飛びかかれて首を喰い千切られる瞬間を見た。声にならない叫び声を上げ、一目散に車に走りかけたが、いつの間にか4本の手が身体にまとわりつき平山は動けなかった。

「離せ！クソツタレ、離せ！」

180センチ・90キロ。メンバーの内唯一ラガーマンらしい体格と見合うパワーを持ち、試合ではまさしくちぎっては投げのパワーの平山が満身の力で抵抗したが、2人の酔っ払いはやすやすと肩と脇腹に激しく歯をたてた。激しい痛みに耐え、それでも車に向かう平山の前にもう1人酔っ払いが立ちはだかった。

稲本の叫び声と同時に、倉本と本田は車を飛び出したが、数メートル走ったところで、酔っ払い（ゾンビ）に取り囲まれた。

「俺が食い止めるから行ってくれ。」

本田が叫びながら、一番近くにいたゾンビに向かって、木刀を上段から頭に振り落とし、振り向きざまに、横手のゾンビの首に斜め上段から木刀を振り落とした。

倉本も3体のゾンビに行く手を遮らていた。

倉本は、まず正面の一体を上段から木刀を落とし頭を粉碎し、右手のゾンビの首に向かって渾身の突きを放った、木刀がゾンビの首から頸椎を貫いたところでゾンビに蹴りを入れ、木刀を抜きながら、左から来るゾンビの足を木刀でなぎ倒し、倒れたゾンビの顔面に木刀を突き刺した。

しかし、倒している間にも続々とゾンビが現れ、じりじりと本田と倉本は後退を余儀なくされた。

「本田！駄目だ！車に戻るぞ！」

「馬鹿言つな！見捨てるのか？倉本！」

「仕方ない！この数相手にしてたら、木刀が保たへん。」

2人がゾンビと戦いながら、中澤達を救い出そうとしている時。

「阿部っ！中澤っ！」

のたうち回る阿部と首から鮮血をほとばしっている中澤を、車の運転席から為す術なく見ていた川口は、平山を襲った残りが車に近寄ってきていることに気付かずじじいた。

「！！…平山は？」

平山のことを思い出し、振り向いた川口の目に飛び込んできたのは、2体のゾンビが不器用にドアから侵入としようとしている姿だった。

「やべえ」

慌てた川口は車を発進させゾンビを振り落とそうと、右に左にハンドルを切った。不運だったのは、川口の冷静な判断だった。

これが、普通の人であればハンドルを右に切った瞬間にバランスを崩し車外に放り出されるか、何かをつかみ踏みとどまろうとし、そこに、逆方向の左にハンドルを切られてバランスを崩し放り出されるのであるが……

ゾンビには、ただ獲物に真つ直ぐに突き進むことの知能しかなく、自身が怪我を恐れて行動を躊躇することもなかった。侵入しようとしたゾンビは右にハンドルを切られた時に、向こう脛を折りながら車中に突っ伏した状態になり、起き上がろうと足掻いたところにハンドルが左に切られて勢いよく身体が浮き上がり、浮き上がる途中に獲物（運転席の川口）があり必死に掴みかかろうとし、その脅威的な握力で川口は掴まれてしまったのだ。あまりの痛みに川口は運転を誤り、ビルの壁に追突し気を失ってしまった。川口が次に意識を取り戻したのは、左腕に食い込んだゾンビの犬歯の痛みであった。

「ぐわあああつ！痛い！痛い！離せ！離せ！あああああーっ。

痛いよう。母ちゃん！母ちゃん！いてえよ〜」

衝突の衝撃で川口の下半身は潰れた車に挟まれる形となり、逃げることも叶わず何度も何度もゾンビに身体を噛み千切られて絶命していった。

何とか、車にたどり着いた倉本と本田は、阿部と助けようとした女性、そして中澤に無数のゾンビが群がる光景と、ステップワゴンがビルの壁に激突し、運転しているはずの川口がでてこない光景を、黙って見ているしかなかった。

「うおおおおお・・・」

本田がとめどなく絶叫し続けていた。

由紀と奈緒美はビル内で料理人の岡崎がゾンビの群れに飲み込まれた時点から自らの意識を閉ざしていただけ車内の喧騒は幾分ましであつた。

稲本は、歯を食いしばりきつくハンドルを握り締め、叫びたい気持ちを必死にこらえていた。

その稲本の肩に、倉本はそつと手を置きそしてはつきりと意志が伝わる力を込めて

「イナ、行くしかないんだ。車を進めよう。」

更に倉本はバックミラーで、本田と女性達の様子をうかがった。

本田は、ワナワナと身体を震わせ泣き続けておりその横で一番年上の女性が優しく肩をさすっていた。ふとアミの視線が上がり、バツ

クミラーの倉本の視線と絡み合った。倉本は静かに目を閉じ軽く頷いた。心得たのか、アミはその胸に本田を優しく抱きしめた。

3列目に座っている2人の若い娘達は、変わらず放心状態であつた。

（稲本も本田も限界やな。女性達も2人は限界を越とるし、もう1人もギリギリつてとこか？安全に休息がとれる場所を探さんと崩壊やな。どうする？）

「倉本！」

稲本の呼ぶ声に倉本の思考は中断された。

「どうした？」

「渋滞？つて言えはいいか？車が放置されてて通られへん。どないすんねん？」

ブレーキを踏みながら、周りをキョロキョロと警戒しながら稲本は答えた。

（なる程な、車で移動すればお決まりのパターンやな。堺筋まで7〜80メートルつてとこか、ここからみた限り堺筋には車がなさそうやな！やるか？）

「イナ、歩道。走れ！」

「ほ・歩道？ゾンビいとりぞ」

「轢いてまえ！」

稲本はハンドルを切り歩道に車を乗り上げさせた。歩道に乗り上げたデリカのハンドルを握る稲本は残忍な笑みを浮かべて

「中澤、川口、阿部、平山！かぁーたきとつたるからな！」

一気にアクセルを踏み込み、歩道にいるゾンビを軒並み轢きころそうと加速した。

「！」

アクセルの踏み込みに対して、タコメーターは勢いよく右に振れたが、デリカは前には進まなかった。

慌てた稲本はギアシフトを改めてDレンジに入っていることを確認しようと手を伸ばしたところ、シフトに置かれ倉本の手に触れた。いつの間にか倉本がギアをニュートラルに戻していた。

「落ち着け！イナ！」

倉本は冷静に言い放った。

「な・なんだよ。一気にに行けって言ったのはお前やる？」

「一気に行き過ぎや！」

何十と言うゾンビを轢いて、踏み潰して走ったら、タイヤに血肉と脂がこびりついてハンドルが効かんようになるやろ？ゆっくりと、車の左右に引っ掛けるように轢くんや！出来るだけ、轢き潰すんは避けるんや！」

「そ・そんなん分かつとるわ！」

「そうか！ほなら行こか？」

稲本はアクセルを軽く踏み込み、時速15キロ程度のスピードを維持しながら器用なハンドル捌きで、ゾンビを引っ掛けて行った。半数以上のゾンビは地面やビルの壁に頭を激しく打ちつけられる結果となり、起き上がることなく事切れていった。

僅か30秒足らずであつたが、稲本は敵討ちの達成感を感じたられた。

堺筋には不思議と走っている車もなく、無人のタクシーなどが乗り捨てられたように点在していた。堺筋に出たデリカを当然のように左折させようとした稲本に

「イナ、キタ（梅田方面）の方がゾンビ多いとおもうで！」

「せやけど、堺筋は北行きの一通やで？俺点数ないねん！………つて」

ブレーキを踏みながら稲本は笑い出した。

「法規守ってるもないか！さっきからポリさんも見かけへんもんな！上本町方面やったな！よっこらせつと。」

稲本は堺筋の4車線を目一杯使いUターンし逆走しながら千日前通に出て、点在する車をぬいながら東へ進んだ。

「もう少し先を左折して直ぐの角や！」

倉本が、避難できそうな場末のコンビニがあると言いこまでデリ力を誘導してきた。

「なんか、雑居ビルと小汚いマンションばかりやな？マンション、結構灯りついとるから生存者もいてるかもしれへんな！」

稲本はデリ力を左折させながら、建物を見上げてつぶやいていた。

脱出（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

ロベリニ（前書き）

今回はちょっとエロ要素あります。

コンビニ

デリカが角を曲がった時倉本は、稲本をつつき前方を指差した。

「パトや！」

倉本の言う通り目的のコンビニのそばにパトカーが停車していた。

「ほんまや、騒動以来初めて見るな！ポリさん乗つとるんやろか？」

稲本は遠目からパトカーを必死に観察した。

「空っぽみたいやな？どないする、倉本？」

パトカーと倉本を交互に見ながら稲本はデリカを停めた。

「本田。用意しといてや！」

倉本も、パトカーから目を離さずに本田に呼びかけた。

「あーう……………」

消え入りそうなかすかな女性の声がした。

倉本はパトカーから目を離し後部座席を振り返ると、アミが困惑顔で自分の膝を指差していた。本田が泣きつかれた後の子供のように膝を枕代わりにアミの下半身に抱きつくような状態で寝ていた。

倉本はおもむろに木刀の先で本田の頬を突つつき

「起きろよ！この赤ん坊！」

と声をかけた。

寝ぼけ眼で本田が眼を擦りながら

「どこや？ここ？………！！」

言いながら、頭越しに感じる人肌と弾力感に気づき、一気に起き上がった。

「わっ悪いい！」

アミから離れながら顔を真つ赤にして、本田はアミの顔と、前から覗き込んでいる倉本、稲本の顔を交互に見渡した。

「ゆつくりと寝たみたいやな。しっかり働いて貰らうで、用意しててや。寢床を確保しに行くで。イナ、パトの横。１メートルくらい離して止めてくれるか？本田！まず手始めにパトカー物色するで！イナは前方を警戒して、えっーと、まだ自己紹介もしてへんから名前が…わからんな。

膝枕さんも手伝って貰えるかな？後の二人は放心状態で使い物にならへんし………後方警戒頼める？」

「織田郁恵です。手伝います。」

少し震えた声でアミこと郁恵は答えた。

「織田さんか。あんまし緊張せんでもいいで……パトの中は俺が物色するから、本田は全方位警戒な！ただしゾンビや人、特に警官が

乗ってた場合は要注意やで！」

「？」

「？」

「ゾンビはわかるけど……何で警官でも注意なんや！助けて貰おうや。」

本田が異議を唱えが、倉本は一蹴した。

「あかん！幾ら警官でも見ず知らずや！こんな状態でサイレンの音も聞こえへんし……警察が機能してとは思えへん！」

しかも、拳銃って武器持つとる？こつちには、女性が3人居てるんやで？しかもかなり刺激的な格好で……何が起るかわからんやろ」

「け・警官やで？そんな節操ないことするか？」

稲本は納得いかずに倉本に言い返した。

「イナ。今は非常時や。もし、自棄くやけ>になった警官なら間違はなく女性を奪い取りに来る。世界中で非常時に繰り返される悲しい男の性やな。」

「難しいことは考えてもじゃあないやろ！倉本が頭って決めたんやさかい。頭の指示には従うしかないやろ！イナ、早くやらんと、どこからかゾンビが出てきたらかなわんで！」

本田が稲本に車を出すことをせっつき、稲本はじぶしぶアクセルを踏み込みパトカーの横につけた。

「心配せんでも大丈夫や！誰も乗ってへんわ！」

いち早くスライドドアから飛び出した本田はパトカーの窓を覗き込んで見ながら手招きをした。

倉本はパトカーのボンネットを触りながら車を一周した。

「エンジンは冷えてるな。ドアは…」

ドアノブを引くと難なくドアは開いた。

後部座席には、どこから調達したのか、1.5Lの水半ダース入りのダンボールが2箱と、調理パンや菓子パンが詰め込まれたビニール袋、カップ麺が大量に放り込まれている買い物カゴがあった。本田に目配せをし、倉本は車内に身体を入れて、ダッシュボードなどを漁り出した。

（パトカーの中ってのはこんなに静かだったか？警察密着のテレビでは無線かなにかからひっきりなしに連絡が流れてたような気がしたんだが？）

ダッシュボードからの戦利品はスイス製の10得ナイフ1本だけであつた。倉本は一旦車外に出て、本田が後部座席の荷物をデリカに移しかえる間、周辺を満遍なく観察していたが、特に通常の夜と変わったそぶりは感じられなかった。唯一の違和感は、深夜の田舎町のように静まり返り、街自体に音が存在しないかのような静けさだった。デリカのアイドリング音と本田の動き回る音しか聞こえなかった。本田が荷物を移し終えると、倉本は運転席側移り、後部トランクオープナーを引っ張った。

ガチャリと音がなりトランクが開いた。中には交通整理用であろう赤いカラーコーンが数本と大きな懐中電灯が2本転がっていた。

倉本は懐中電灯を本田に投げ渡し、その横に置かれていた紙袋を開けた。懐中電灯用の単一アルカリ電池の2本パックが6つと、重め新聞紙に包まれた塊があった。塊を手に取り新聞紙を開くと、そこに包まれていたものは実弾であった。塊を紙袋に戻して、その紙袋も本田に投げ渡した。

武器になりそうな車載工具を探したが、ドライバーとジャッキ程度しか装備されていなかった。

本田と郁恵にデリカに戻るよう指示を出し、倉本自身も車に戻りかけたが、思い出したように車に戻り、助手席の前から発炎筒を取り出して、デリカに戻った。

「何か、役に立つ物あったか？鍵はついてへんかったんか？」

稲本は全員が乗車するのを確認し、運転席側のドアロックを作動させた。

「特に何もなかった。紙袋の中に拳銃の弾が50発位か？入ってたくらいかな……」

倉本は何かを考えながら、上の空で稲本に応えていた。

「弾だけあってもしょうがないじゃん！鉄砲はなかったのかよ！」

期待を裏切られた稲本は誰にともなく独り言をつぶやいた。

「まあ、考えてもしょうがないな。」

倉本は一人で頷いて、稲本の肩を叩き

「コンビニに行こか！まず、低速で前を横切って店内の様子を確認しよか。」

稲本が頷き、デリカはコンビニの前を2度ゆっくりと横切った。

「倉本、見えたか？」

本田が興奮気味に聞いた。

「ああ。1体かもしかしたら2体かは居てそうやな……. 二人で何とかするしかないな。」

イナ、コンビニの正面玄関に横付けしてくれ、出来るだけ隙間がないくらいにビッチとやで、車で正面玄関を塞ぐつもりで頼むわ。左側をつけてや！本田、スライドドアから二人で一気に出るで」

後部座席から移動しながら倉本は木刀を握り直した。

「織田さん！俺と本田が出たらドア閉めてロックな！イナ、俺達が殺られたら後は任す！」

「お・おい」

稲本が返事をする前に二人はデリカを飛び出した。自動ドアが開き、二人はゆっくりと店内に歩みすすんだ。場末のコンビニにしては広い店内であった。入って右側には雑誌棚があり、棚の前には店員らしき人物が血の海の中に横たわっていた。倉本が無言で本田に合図し倉本は横たわった店員の方へ、本田は店内の奥へと進んだ。

雑誌コーナーの真向かいの事務用品棚から通路を覗き見ると、侵入者に気づいた少し年配のゾンビが本田に向かってきた。口の周りは血だらけてあったが、他に傷らしきあとのないビルの外を徘徊しているのと同じタイプのゾンビだった。コンビニの制服を着ているところを見ると店長だろうか？

店長ゾンビが両手を差し出すように上げると右手首から先が千切れて右手が無かった。本田は摺り足で前進し半歩左に寄り、店長ゾンビの右首の少し上を狙い上段から袈裟懸け（頸動脈・鎖骨あたりを斜めに）に木刀を振り下ろした。木刀は見事に店長ゾンビの首の頸椎を粉碎した。

一方倉本は、頭の後ろに派手な穴を開けて倒れている店員を木刀を使い器用にひっくり返した。右胸や左肩などに傷があり額に小さな赤い穴が空いていた。

（拳銃やな。警官はここに踏み入ったみたいやな。どこにいるんや？）

慎重に歩み進めているとドサリと何かが落ちるような音がした。

目の前のトイレの確認を断念して、音の方を確認に行くと本田がゾンビを袈裟懸けで仕留めていた。

改めてトイレを確認すると

「！」

トイレのドアの引き手（ドアと一体型になっているアーチ型のタイプ）に、千切れた右手らしきものが手錠に繋がりがぶら下がっていた。

本田は、店長ゾンビを始末した後、更に更に店内の奥に進んでいた。入り口から3列の商品棚を過ぎた通路についた本田は思わず息を飲み、同時にこみ上げてくる吐き気を必死に耐えた。大きな血だまりの中に全裸の女性が足をM字型に開脚しこちらに向けに横たわっていた。腹部は引き裂かれており身体の周りに内臓が喰い散らかされた状態であった。腹部からはまだ血が流れていた。その横に、同じように首を喰い千切られた警察官の制服の男が絶命していた。

まだ、殺されて間がない様子である。倉本と本田が店内に入った時に臭いで気がつかなかったのもすべてがつい今しがたおこったばかりであるからであった。通路の反対側に倉本がたどり着き、同じ用に惨劇に言葉を失っていた。

死体を避けるように倉本は本田に近寄り

「大丈夫か？」

小声で聞いたが、その倉本の声も心なしかうわずっていた。

「ああ。……………」

何とか、吐き気をこらえて本田は返事をした。

「事務所に行くぞ」

倉本はレジ奥の事務室に向かった。レジを乗り越えたところで、いきなり事務室のドアが開き、ズボンをおげベルトを閉めながら警察官が出てきた。

「高橋！ねーちゃん取り替えようぜ。こっちの奴、高校生にクセしてガバガバでやんの」

顔を上げた警察官は、倉本と本田を確認した瞬間に右の腰に手をやり拳銃を引き出していた。

「何だ、てめら！おい！高橋、井沢！高橋！井沢！聞こえてんなら早く出て来いよ！」

警察官はヒステリックに仲間と思える警察官の名前を呼び続けた。

デリカ車内：

いつでも2人が戻ってきた時にドアを開けれるよう、同時に加勢できるように斧を手にドア越しに店内の様子を伺っていた稲本は、真正面から警察官が出てきて二人に拳銃を向けているのが見えた。

警官の姿を見た瞬間に、稲本は倉本が正しい事を悟った。間拔けな話したが女の物のパンティーを頭に被っていたのである、事務所内で何が行われていたかは火を見るよりあきらかである。

絶望するとともに車内の女性を守らねばと、稲本は郁恵に最後尾の座席に移動し他の2人とともに出来るだけ身を隠すように、同時に一番大きな果物ナイフを渡した。

「俺が、この斧で守りますから・・・隠れていて下さい。もしも時はナイフで自分を守ってください。」

警官の呼びかけに応えるかのようにトイレからドンドンと叩く音が聞こえた。

事務所から出てきた警察官は拳銃を突きつけ、木刀を床に置くように指示し倉本と本田をトイレに向かって歩かせた。

トイレに向かいながら、正面出口を塞いだデリカに気づいた警官は、

いぶかしげにデリカを舐めるように観察し

「デリカで、出口に蓋かぁ！頭いいじゃん！女乗つけてねえか？見たとこ空みたいやけど後で確認させてもらっわ！まずはトイレや！」

先ほど倉本が確認した時には気づかなかったが、トイレはスライド式のドアのスライド部分にモップが挟まりドアが開かないようになっていた。

本田が警察官に命令されてモップを取り外すと、若い警察官が汗まみれになりながら出てきた。

「本気、びびったっス！山口の兄貴のゾンビゲームやばいっすよ！」

「ゾンビゲーム？」

思わず本田が聞きなおした。瞬間、山口の肘鉄が鳩尾にあたり本田は膝を折り苦しそうに床を転がりまわった。

「そうだよ！山口の兄貴と高橋でゾンビをひっくり返して手錠でトイレのドアにつなげたんだよ！トイレに行く時は命がけてわけさ！おかげで高飛車のセレブねーちゃんがトイレ行きたいってだけで、ゾンビを押えて欲しいと懇願して俺のを涎まみれでしゃぶってくれてよ！ヘッヘッヘッ！」

そんで、俺がトイレしてた時にゾンビが 暴れ出していきなりドアがしまっちゃって、ドアが開かなくなっちゃって……
そのあと何かが千切れるような音がしたと思ったらゾンビがドアから離れちゃったんで……俺その……兄貴に拳銃取り上げられてるでしょ。兄貴が事務所から出来るのを待ってたんすよ！エッヘッヘッヘッ！」

「お前、またクスリやつとんな！何処に隠し持つとんたんや！クスリは判断力が落ちるからあかん！って言ったやろ！ぼけえ！」

山口は井沢をに足蹴りを見舞い、井沢は勢いよく洗面所に吹き飛ばされてどこかで頭を切った様子で髪の毛の間から血を流しつつ這い出してきた。

「兄貴いゝ。いてええよゝ」

「てめえは使えねえな！」

吐き捨てるように言い捨てて倉本に向かつて

「もう1人見かけなかったか？」

と拳銃をチラつかせながら聞いてきた。

「奥の、冷蔵棚の前で2名殺られてた……」

倉本は抑揚のない声で応えた。

先ほどの全裸の女性と警察官の死体のところに行き、用心深くその死を確認した山口は

「こいつも使えねえな……」

立ち上がり、倉本と本田に向き直り

「車ん鍵よこせ」と左手を差し出した。

2人は車の鍵などもっていないが、倉本がいきなり

「本田、逆らっても無駄みたいや！おとなしい、鍵だし！」

倉本の意図はわからず、素のままに本田が答えた。

「鍵？俺は持っていないで……ずっと後部座席で寝とったやんけ。」

「あつ！そうか。わりい！わりい！俺やな」

倉本は右や左のズボンのポケットを探すフリをしていた。

（疑つとらへんみたいやな。一か八か特殊警棒で反撃か…後はズボンの後ろポケットを探すふりだけや）

倉本が右腰の後ろに差し込んでいた特殊警棒を握ってタイミングを計るために山口の方を見た瞬間、本田を横に突き飛ばしながら自分も冷蔵庫にめり込む様に身を横に振った。山口と井沢の後ろには、内臓の無い女性と首を食いちぎられた警察官がユラユラと揺れながら近づき、それぞれが山口と井沢の肩口に大きな犬歯をつきたてた。

「いてえ！いてててて……ぎやあああああ！」

肩の肉を食いちぎられた山口の指はその痛みに耐えかねて拳銃の引き金を絞った。弾は突き飛ばされる直前に本田の頭があったところの壁を削った。

拳銃が発射されたのを確認すると、倉本は本田を抱き上げて木刀を

置いた正面出口に走った。

後ろでは、山口が肩に噛みついた女性ゾンビと揉み合いながら床をゴロゴロと抱き合う形で転がっていた。頼みの拳銃は手から落ち、ベルトに繋がったスパイラルコードで身体の内側にはあるはずなのだがコードを手繰り寄せる手段がなく噛みつこうとする女性の顔を必死に手で突っ張る形で防御するので必死だった。

「ぐらあああ！助けんかあああ！」

山口は相変わらず上から目線で誰にともなく怒鳴りつけていた。

隣では、クスリで lari っている井沢が逆にゾンビの首にかじりついていた。もちろん、ゾンビほどの咀嚼力はなくゾンビにとっては獲物が更に接近してくれたに過ぎなかった。

肩の肉の次は、当然柔らかい首が狙われた。ゾンビは首にかじりついている井沢の頭を強引に引き剥がしカブリと喉笛に犬歯をたてた。

「へっへっへへへ！エクスタ……」

井沢が言い終わらないうちに噛み千切られた喉から鮮血が吹き出し、井沢は四股をピクピクと痙攣させながら絶命していった。

床でゾンビの犬歯から必死に逃れていた山口は

「クソツタレ！は・な・れ・ろ！」

僅か数時間ではあるが、既に数力所で略奪や陵辱を繰り返していた悪徳警官ではあるが、ある意味その場その場でゾンビとそれなりの死闘を繰り返していた男である。突っぱねている手を徐々にゾンビ

の顎の下にずらしていき、顎を支点に一気にゾンビを首を捻り頸椎をへし折った。

自分の顔の横に崩れ落ちたゾンビの死に満足し、ゾンビの身体の下から這い出そともがいている時木刀を手に戻ってきた倉本達に気づき

「早く助けるよ！てめえらはよ。」

更に、静かに木刀を持ち上げた本田に気づき

「おれは、化け物じゃなく真正正銘の人間だぜ！てめえら、人間も殺す気かあ？この人殺し野郎！」

唾を吐き散らしながら山口は喚いていた。人殺しと言われ、本田の木刀はピタリと止まってしまった。

（けっ！トーシローが！こうなりやこつちのペースや。何とか言いくるめりや勝ちや！）

内心勝利を確信した山口は、たたみかけるように

「俺は警官やど！拳銃も扱える！てめえらも子分として助けたるわ！食いもんも女も…全部奪ったもん勝ちや！王様やで！はよ、上のゾンビよかしてか！」

倉本が、足の甲を使いゾンビをどかすと山口は

「こつちのあんちゃんの方が話しが…ガッ！な・何ガッ！」

倉本は無言で山口の口に爪先で蹴りを入れあと、更に木刀で死なない程度に殴りつけた。

「こんな奴は人間やないわ。気にすんな。ほんまやったら、殺すとかやけど……まあ情報を聞き出してからでも遅ないやろ。それより、そのポン中トドメささな動きだしよったら面倒やで」

「せやな、ナンマイダ！」

本田が木刀を頭に突き立てた。

「さあ、事務所ん中やな！せやけど俺苦手や！」

倉本はデリカに郁恵を呼びに戻った。

悪徳警官の山口を気絶させて、手錠を両手両足にはめて事務所の廊下に放り出しているあいだに、郁恵が事務所で陵辱の限りを尽くされた高校生を優しく慰めていた。

その頃には由紀も奈緒美も徐々に正気を取り戻し始めて、郁恵と一緒にその高校生に涙しながら慰めていた。

男3人は、絶命したゾンビを慎重にデリカを動かして外に出し、店内の血溜まりを掃除していた。流石にコンビニである、ゴム手袋から消臭剤まで足りない物はなかった。24時間営業ではないコンビニだったので、電動シャッターを下ろして一応の安全を確保して、一同はコンビニの2階にある2部屋の休憩室の片方に集まっていた。

「さあ、まずは自己紹介からやな」

倉本は全員を見まわしてゆっくりとした口調で話し始めた。

「まずは俺からな、名前は倉本宗一郎。30歳。しがないサラリー

マンで、八尾に嫁と娘（13歳）がいてる。他の二人とは大学時代のサークルの仲間や」

「俺は、本田信正。建築事務所で働きながらバイトでホストもしてる。まあ売れてないヘルプ君やけど…年は倉本と一緒に。あと、実家が剣術道場やから、木刀さえあればゾンビは怖ないわ」

「僕は稲本隆之。長野の製薬会社勤務。本田と僕は未婚です。」

「女性陣では私が一番最年長ね。織田郁恵です。3ヶ月前に会社が倒産しちゃて…なかなか他の仕事が見つからないんでセクキャバでバイトしてました。年齢も言わなきゃだめ？ですよ…笑わないで下さいよ、キャバで働いてたくせに28です。」

よほど恥ずかしいのか…言い終わると顔を真っ赤にして下を向いた。

「高倉由紀です。朝日ヶ丘高校の2年。17歳です。ち・ちよつと事情があつて友達の奈緒美とアミさん…いや、郁恵さんのお店に今日からアルバイトに来てました。」

セクキャバって知らなかったんです。セクキャバとキャバって何が違うんですか？って…わ・私何言つてんだろ？こんな時に…やだ…あ・あのアミさん、倉本さん、本田さん、稲本さん助けいただいてありがとうございます。」

ボロボロと涙がとまらない由紀に郁恵が近づきそつと肩を抱きしめた。

「わ・私は武田奈緒美です。奈良の富雄女子学園の2年です。わ・私が悪いんです。由紀ちゃんをこんなことに巻き込んでしま…」

奈緒美も郁恵にしがみついてオンオン泣き出してしまった。男3人は展開に対処出来ずにオロオロするばかりであった。

「私は橋本香織。高校3年です。まあ殆ど学校行つてないけど…外見の通りで、俗に言う落ちこぼれやし…今日のこと、まあ犬に咬まれたみたいなもんやと思ってます。

こんな異常な状況やから、えーと、倉本？さんに本田？さんに稲本？さんやつたっけ？

助けてもらたし他の女の人は普通の人達やし、こんな私のために涙流してくれたお礼もあるしどうせ汚れついでやから、溜まったら私で抜いてもらったらかまわへんです。

あっ！避妊だけはしてもらいたいんやけど…」

投げやりではないが、自嘲気味に笑い顔でごまかそうとした。

「おい…」

倉本が一言注意しようと腰を上げかけた時、既に由紀がは脱兎のごとく香織の目の前まで行き、手加減なしに平手打ちを見舞った。

香織が吹っ飛ぶほどの勢いであり、平手打ちをした由紀本人も肩で大きく息をした興奮状態であった。

「バカ！バカ！バカ・バカ・バカ・バカ・バカ・バカアアアアアア女の子がそんな言ったらあかんやろ！投げやりになったらあかんわ！」

徐々に鳴き声に変わりながら

「ついさっき、私や郁恵さん、奈緒美は……お店の料理する人と女店長さんに命を助けてもろてん。料理する人なんか、たっくさん迫

つて来るゾンビに1人で立ち向かって……グスツ、グスツ………
店長さんも私と変わらんくらいの背のちっちゃな人やったのに……
…笑ってゾンビの群れに突っ込んでいったんや……！助けてもらっ
た命を……女性を粗末にしたらあかん……！あか………そんなし
たら店長さんに叱られるわ。香織ちゃん1人でそんな背負わされ
へん！わ・私も、私も……経験ないけど、私もするから、怖いけど
私もするから……香織ちゃんだけ辛い目には会わさへん。せやから、
そんなに自分を安売りせんという……」

ヨロヨロと香織に近づき香織を力一杯抱きしめながら、由紀は絶叫
していた。

「おい、おい……」

言いかけた倉本を郁恵が制しながら、奈緒美に声をかけ二人に近づ
いていき、倉本達に部屋を出ていくように目配せした。

倉本達はなすすべなく、部屋から退散した。男性陣が退室した休憩
室では鳴きじゃくる由紀にしがみつかれ、途方に暮れている香織と
由紀が落ち着くまでじっと待っている郁恵。オロオロとしている奈
緒美が微妙な空気の中にさらされていた。ひとしきり泣きつくした
由紀がオズオズと香織の身体から遠慮がちに離れた。

「ごめんなさい！叩いちゃって！」

由紀が香織に必死に頭を下げていた。

「かまへん、かまへん。私も投げやりな言い方過ぎたんなもしれへ
んわ。しかし、あんた……イノシシなみやな！」

香織が由紀の頭を撫でながら言った。

「イノシシって！それは言い過ぎちがいます？私は香織さん……」

由紀が膨れっ面で文句を言いかけた時にパンパンと手をうち郁恵が割って入った。

「由紀ちゃん、間違ってないよ。それに香織ちゃんも間違ってない！二人とも立派だよ。」

どちらも立派と言う言葉に3人ともキョトンとした表情で床に座り込んだ。

「いい？よく聞いてね。岡ちゃん、あつ！この人はさっきの料理する人ね。」

それと沙織さん。店長ね。

2人が命がけで助けてくれたんだから由紀ちゃんと奈緒美ちゃんは何があっても生き残らなきゃだめだよ。倉本さん達にも助けられたよね！最初はもっとたくさんいてなかった？覚えてる？」

奈緒美は他にも思い出そうとしながら

「ほんとだ！スッゴく大きい人や髭の人がいてた！途中ではぐれたんですか？」

「ビルから出て、少ししたところで助けを求めてた女性を助けようとして……」

郁恵は中澤が絶命する瞬間を思い出してそれ以上言葉が続かなかった。

しかし郁恵は気持ちを奮い立たせて

「香織ちゃんの間緯は私達にはわからないわ。でも、わかっていることがあるの。わかる？由紀ちゃん」

「すみません。わかんないです。」

「そう。別に恥ずかしがることじゃないからね。私達は偶然、岡ちゃんや沙織さんや倉本さん達に助けられたんだよね。

でも、香織ちゃんは残念ながらそんな人達に出会わず、あいつらと出会ってしまっただけ。そうして私達も香織ちゃんも、今ここで生きているの！

たまたま、倉本さん達が立派な人達で…一歩間違えれば香織ちゃんと同じだったのよ。

私なら香織ちゃんと同じことをしたわ。

いや顔を叩かれてる香織ちゃんはかなり抵抗したんだと思うけど、私なら死にたくないからきつと進んで淫らに男性が喜ぶこと全てをするわ。だって死にたくないから……………」

「そんなことあらへん！私、勉強出来へんし、親からもほったらかしやし…………」

唯一、お金を稼げるんが…………身体やし。でも、ウリとかはやってへんで！一応、彼氏ばかりやしみんな、ご飯とか食べさせてくれるから、私の身体がお礼みたいなもんやねん。せやから、そうやって中学から生きてきたから、全然大丈夫やねん。

年の割に結構教えこまれてるから…大概の男は満足させられるんやで…………ほんまに、そうやって生きてきてん。」

「香織ちゃん、かまへん、かまへん。誰でも自分の生き方があるん

や。香織ちゃんがそれならそれでいい！でも、一つだけ約束してくれへん？私も、倉本さん達に助けてもろた時正直助かりたいから、由紀ちゃんも奈緒美ちゃんも見えてへんかってん。

全身全霊で7人全員にご奉仕して、奴隷になつてでも守って貰おう。生かして貰おう。

言われたらどこでも受け入れよう、どこでも股を開こう。口でもどこでも受け入れよう。そして喜ばれるよう歡喜の声を張り上げよう。つて覚悟しててん。

せやけど、倉本さん達はそんな邪な^{よこしま}気持ちなんか微塵もないねん。

亡くなった4名の倉本さん達の仲間、岡ちゃん、沙織さんみんな・・・助ける』つて言う純粋な気持ちだけやねん。

せやから、私が、香織ちゃんや由紀ちゃんや奈緒美ちゃんを守るんや。そのために必要ならどんな男にも媚びる、どんな男とでも寝る男が望む事はなんでもして、貴方達を守るわ。だから、香織ちゃん駄目、まだ若いんだから・・・ねっ！それだけ約束してね。お願い。」

真剣な郁恵の顔に目に、香織は何も言い返すことが出来なかった。

郁恵の決意を汲み香織も一言だけ郁恵にお願いした。

「わかりました。その代わり私とも1つ約束してもらえます？郁恵さんに何かあった時、郁恵さん1人では相手に出来ない数の時、私も引き受ける、助ける、協力する。由紀ちゃんや奈緒美ちゃんは2人で守る。どう？こんな馬鹿じゃあかん？私も何かに役に立ちたいねん。」

「香織ちゃん」

郁恵と香織はヒシと抱き合った。

由紀と奈緒美は、あまりにも物凄い決意にただ啞然とするばかりであつた。

ツンデレちゃんこと由紀は

（郁恵さ〜ん、香織ちゃ〜ん、それって妄想すぎるんちゃう？悲壮感バリバリやん。倉本さん達、全然そんなんちゃうやん。さつきは私も雰囲気飲まれたけど…冷静に考え直した方が…ええんちゃうんかな？）

奈緒美にも意見を聞こうとすると、奈緒美はウルウルと感激しまくり状態であつた。

（あかんわ！倉本さんらに期待するしかないんか！）

テンションの下がる由紀であつた。

「由紀ちゃん、奈緒美ちゃん！良いわね！倉本さん達を呼んで来て」
郁恵と香織は女性陣の話の件を赤くなり青くなり倉本達に説明した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

3人は開いた口が塞がらなかった。3人の反応を見て、奈緒美が怒りだした。

「郁恵さんと香織さんの決意を聞いたんでしょ？何んとか言ってる！それとも、私達全員、手籠めにせな満足出来へんの？そ・それなら、私も何でもするわ。今直ぐパンツ脱げばいい？く・口は下手やで、彼氏菌が当たって痛いて怒られるねん。
その代わり、由紀は、由紀だけは勘弁したってな！由紀はバージンやねん！！！！」

郁恵と香織について奈緒美まで言い出した。奈緒美にいたってはスカートの中に手を入れており、真つ赤な顔で今にでもパンツを脱ぎそうな勢いである。

（バージン、バージンって叫ばんといてや、恥ずかしいやん。たまに相手がおらんかっただけやん。な・奈緒美も何パンツに手をかけてるん！へたに男を挑発してることになるとちゃうん？初体験が乱交とかから輪姦とか？冗談ちゃうで！）

プルプルと怒りが込み出す由紀であった。

（このままでは今度は由紀ちゃんが……おい！肩がプルプルし始めてるやんけ！

何か途轍もないこと言い出しよるぞ！何とかこいつらの妄想をとめやな！ゾンビより難儀なことになるぞ！）

冷静な倉本が始めてうるたえた。

「あつ————うっさいのお！何、ねぼけたこと言うたんじゃ！何？犯される？何でもする？あほらし、そんな事より生き抜くことが最優先や！まだなんの状況もわからないのに！アホみたいな妄想、かってにしとれ。むしろくしゃするから、山口痛めつけてくるわ！」

（よくやった！ノブ。抱きしめたるわ。チャンスは1回こつきりや！イナがボケつとしとる今や！）

本田が、怒鳴り散らして階段をくだっていった。

「本田、ゾンビに噛まれた奴やから要注意やぞ！なんや返事なしか？イナ！頼むで、見てくるわ！」

（脱出成功や！優しい稲本君！あとは任せた。骨は拾たる！）

倉本が、ゾンビから逃げるより早く脱兎のごとく階段を下りて行った。稲本は1人ぼつと取り残された。

いきなり怒り出した本田とその勢いに奈緒美はシュンとして、縮こまるように床に体育座りし、頭を身体に抱え込み丸まるまった。

（毎度のことやなあ。男と女の話はいつもこのパターンや！本田はキレたふり、倉本は本田に格好つけて逃走。大学時代と変わらんやんけ、進歩のない奴らやなあ。

しかし、オナゴ達も強烈な妄想やんなあ。郁恵さんって、どMなんかあ？参ったわ。）

頭を掻きながら困り果てた稲本は、郁恵と香織の間に同じ様に体育座りをして、ボソボソと話し始めた。

「郁恵さんと香織ちゃんは、俺達がそんな風な男に見える？」

首を振る2人。

「そう、ありがと。こんな混沌とした状況やから心配が心配を呼ん

で、変な妄想みたいなんに駆られただけで……倉本がコンビニに入る前に、中途半端に非常時の男の性やなんて心配させた拳句に香織ちゃんの件やからなあ。郁恵さんが神経質になるのも無理ないわ。香織ちゃんも、頼りどころを自分で探さなあかんかったしな……

なあ、今の話しはお互いに忘れへんか？」

「でも、倉本さん達に何か……言いたくは無いか何かあったら、そうなるかもしれないですよね。」

うなだれながら、郁恵が押し殺した声で質問してきた。

「ごめんな。覚悟はしといて……」

ビクツとして、郁恵と香織が顔を上げた先には困ったような笑顔をした稲本がいた。

「やっと亀が顔だしよったわ！俺一人やつたら覚悟してもらおうけど、倉本に本田もおるから安心し、簡単にはそんな状況にはさせへん。ほな、下行こか！俺らが山口をしばいてる間に女性の仕事頼むわ。奈緒美ちゃん、パンツ脱ぐ覚悟で旨いもん食わしてな」

踵を返して稲本は階段を下って行った。残された4名は……

「熱病にでもかかってたんかな？」と郁恵が無理に明るくし

「ほんまや、いや！ちゅうほどされたのに、欲求不満やったんかな？」

香織がまたくだらない話で誤魔化そうとした。

「ほんま、乗せられてむっちゃ恥ずかしい思いしたわ！なんで、彼氏にHの最中に怒られる話しせなあかの！パンツも……ちよびつと濡れてしもたし……」

奈緒美は本気でイライラ怒りながらも……

「まあ、由紀の貞操は守れたからよしとするか！その代わり、今日の『女』当番は由紀と言うことで……おいしい食事をお願するかな。ツンデレちゃん！ご飯を作りましたまえ！」

4人はお互いの顔を見比べながら、惨事以来初めてお腹の底から笑い声をあげた。

（奈緒美も何が貞操の危機は免れた。よ！あんたの行為が一番危険やったやん！でも、良かった。）

一階事務所

猿ぐつわをされた悪徳警官 山口が椅子に縛り付けられていた。椅子をギシギシ軋ませながら声にならない唸り声を上げ山口は暴れていた。後ろから本田が手加減をしながら木刀で肩を打ち据え、やつと山口は大人しくなった。稲本が慎重にタオルを捻った猿ぐつわを外した。

「てめえら！こんなことしてただで済むと思うなよ！俺は警官やぞ！」

「らしいな……山口次郎巡查長。30歳か……俺らとタメやな。」

倉本が暗い声で机に並べられた山口の持ち物を手に取り一つ一つ確認していた。

「タメだと！だからってどうしたんや！警官を拉致して、てめえら！ゴフツ！」

本田の木刀が鳩尾に入り山口は激しく咳き込んだ。

「返しとくわ。」

本田は木刀を肩に担いで山口の周りをゆっくりと歩いていた。

「山口巡査長。俺達の質問に答えて貰おうか。」

倉本は相変わらず机の上の品々を弄りながら山口に言った。

「教えて欲しけりや、手錠を取って、飯と飲みもんよこせや！」

唾を撒き散らしながら、まだ偉そうに自分勝手な言い分を喚き散らしていた。

「イナ。女性陣とこ言っというて。多少の悲鳴は無視してな。女性達は部屋に近寄らさんというてな。」

倉本のあまりにも暗い目つきに、稲本は無言で従うほかなかった。それほどの威圧感が今の倉本を覆っていた。

（30にもなつて…また人を脅さなあかんのか…）

倉本は山口に近寄りながら溜め息をついた。

「お前、どこの生まれや？」

山口の裸足の左足の親指を軽く踏みながら倉本は尋ねた。

「お前には関係ないやろが！それより手錠外せや！ポケエ！」

「!!!!!!」

山口が声にならない叫びをあげて、目から大粒の涙を流していた。山口の左足の親指は、倉本の革靴のかかとで力一杯踏みつけられていた。

「相変わらず、えげつないなあ」

本田は相変わらずグルグルと回っていた。

たっぷりと時間を与えて、倉本はもう一度聞いた。

「どこの生まれや。次はもう少し痛いぞ！」

「……………」山口は答えようとしない。

（へっ！トーシロが、拷問ごっこつもりか、なめんな。）

逆に山口は無言のまま倉本を睨みつけた。倉本は、山口の右手の中
指を無造作に勢いよく逆に曲げた。

「ぎゅあああああ…」

山口の中指は通常とは逆に曲がり、真ん中辺りから折れた骨が肉を突き破っていた。

「手えの指だけやったらあと9回は黙秘出来るな。もう一回聞くけど？」

山口は自分の指と倉本を交互に見て、子供のイヤイヤのように首を左右に降り続けていた。倉本が左手に触れた瞬間に

「だ・だいとう」

倉本は満足げに笑みを浮かべて

「やっと、素直になったやん。ゆっくりと話そか？」

山口は、涙を溜めた目で怯えながら倉本を見て

「け・警官を、ご・拷問するんか…」

「申し訳ないけど、お前咬まれてるやろ？定番やったらゾンビになるんやから、どっちゃんにしろおんなじやろ」

あっけらかんと本田は言い放ち、ついでのように山口の頭をコンコンと木刀で叩いていた。

「ほなら、色々と聞こか、山口くん。」

「まず、どこの所属や？」

倉本は山口の目の前に椅子を引っ張り出し、腰掛けながら尋ねた。

「それと、何で警察が動いてないねん。お前ら以外見かけへんのやけど？」

「そ、そんな俺はしらんがな……」

口答えした山口は木刀で威嚇する本田に怯えながら答えた。

「知ってることだけでかまわへん。無線とかの連絡はどないやねん？こんなになる直前は何しとってん？だいたい、いつ頃から始まったんや？」

どうも、質問者は倉本。威嚇者が本田と分担が決まっている様子だった。喉をゴクリとならして山口は

「答えたら、助けてくれるんか？」

いきなり山口の目前に木刀が振り下ろされ、山口の前髪が風でしないだ。山口は恐る恐る本田を見上げ、その冷たい目にさらに怯えた。

「俺は天王寺警察の警邏課で、毎日パトカーで市内をウロウロしてるんや。5時間くらい前に、課長から無線で……あちらこちらで人が襲われてるて連絡があつて、現場に行けて命令かと思つたら

拳銃で撃つても死なへんみたいやと言つて、発砲許可と予備弾薬の用事してるけど府警本部も他の所轄も殆ど連絡が取れへんらしい。そしたら、なんや署内が騒がしいからと無線がきれたんや。」

「5時間前から始まつつたんか！で、それからどないなつたんや」

「ほんで、署内の同僚やらに携帯で電話したんやけど……誰にも繋がらへねん。」

やっと繋がったんがさっきの二人や。1時間ほどして、課長から署に戻ってこいと無線連絡があったんや」

「課長から聞いた話しやけど……署内でいきなりゾンビが現れよつたらしいわ。課長が予備弾薬を取ってかけつけたら、署内はゾンビだらけで……おかしなことに、大半が普通の酔っ払いみたいに歩いよつたらしい。その酔っ払いみたいなのが、課長や他の階から逃げ出してきた奴らに襲いかかってくるんやと……」

何人が噛みつかれてる間に課長が10人ほど率いて会議室に籠城したらしいんやけど……その内の何人かが……身体がむちゃくちゃ痒いとか騒ぎ出して……倒れ込んだらしい。そしたら、数分で目ん玉が白く濁ったようになって……無事な仲間を襲い始めたんや……課長も何ヶ所も咬まれたけど、みんな撃ち殺して、あっ！頭撃つたら死ぬって課長が言うよつた。丁度3人で署の前に到着したんやけど……ゾンビが溢れかえって……課長に個人携帯無線で連絡したら、今のことを教えてもろて、1人でも助けろって……会議室の窓から弾投げてくれたんや。」

「で、市民を助けんと……狼藉してオナナ襲つとってんな」本田「会議室からは弾だけ違うんや……課長も落ちて来たんや。」

課長が地面でピクピクしてて……んぞ！そこから折れた足から骨突き出したまんまで起き上がって……襲ってきたんや！世紀末なんや！どうせ死ねんや！最後くらい最後くらいええ思いしたないか？オナナかて、喰い殺されるよりマシやないか！……………ヒイ

……………」

本田の最上段の構えから振り下ろされる木刀に悲鳴を上げる山口。

ガッツツツ！

本田が振り下ろした木刀は山口の額のギリギリのところまで倉本の木刀に妨げられた。

「邪魔すんなや！倉本！こう言う人間の屑は始末した方がええって！」

木刀を引かない倉本に本田は文句タラタラで食い下がった。

「まあ、まちいゃ。今の説明は非常に興味深い内容やで！？なあイナ？」

いつの間にか稲本が戻ってきており、山口の死角の壁にもたれかかっていた。

「ほんまに興味深い話しやな。」

稲本は壁から離れながら山口に近寄ってきた。

「え？何んやねん？その興味深い話して？」

本田は稲本と倉本の顔を交互に見ながら離れた椅子にどっかりと座りこんだ。

「まず第一に、山口君だっけ？お前、かなりきつく肩の肉を喰い干切られてるよな？」

思い出したように山口は自分の左肩の傷口を見た。

既に血は渴ききっていた。

「お前の話しやったらそんだけ咬まれとったら、もうゾンビになっておかしいんじゃないか？」

山口は必死に首を振り、チラチラと本田を見ながら

「嘘はついてへん！て！指、へし折られて……木刀で頭力チ割られる……のに……嘘ついてもしゃないやん……け」

本田が椅子から立ち上がると

「ほんまやって！信じてえなあ。いや！信じて下さい。お願いやから……やから……」

よほど本田が怖いのか最後には泣き出しながら嘘をついていないと必死に主張した。

「嘘をついてるなんて言ってへんやろ？少なくともお前の仲間や……途中で見た奴らは、課長さんの言う通りや。無傷のタイプと傷だらけのタイプがいてるな。多分、無傷が襲って傷だらけが発生してるんやろ。」

「問題は……無傷やな。傷だらけは如何にも咬まれて感染しました。やけど、無傷は何でゾンビになったんや？」

「そんなん、俺にわかるはずないですやん。」

「お前には聞いてへんわ！まてよ！警察？さっきの課長の話しやけど、大半が無傷タイプやったな？課長さんはゾンビになったんわ、咬まれた後か？」

「多分……咬まれた言うてからも数分は普通の喋り方やった……で

す。」

未だに本田が動かたびに首をすくめながら山口は答えた。

「おい！お前、チャイナ・インフルエンザワクチンの予防接種したか？仲間の２人は？課長さんは？」

「?????.....俺は...署内の強制接種の時には旅行であらへんかったんで一般接種に行けって言われたけど、面倒くさいから行っていない.....高橋と井沢はしらんだけど...受けたって話しはしてなかったと思うけど.....」

課長は...胃潰瘍でこの間まで入院してたし、警察病院が一杯で民間病院やったから警察や消防みたいに強制分のワクチンはしてないと思う。

あっ！高橋と井沢は年末から流行ってる、普通のインフルエンザワクチンは受けたって行ってたわ。今、警察内で流行ってるねん.....俺は...受けてないけど.....」

コソビニ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

コンビニ 2 (前書き)

やっと、少しだけ時間の遣り繰りが出来ました。

来週は僅か15分間、人に会うために往復で5時間の新幹線……

誰か代われよ！と叫んでも……虚しく響くだけです。

なかなか進まないですが…

久しぶりの『絶滅種』地味な内容で申し訳ありませんが……

こだわります！

読んでやって下さい。

コンビニ 2

「おい！」

稲本が倉本と本田に呼びかけて部屋の外に出るように促した。

2人が事務所を出ると稲本は事務所のドアをキツチリと閉め

「山口くんのロープ、外れたりせえへんやろな？」

「まあ無理やろ。固結びしてあるし、タツプリと水にも濡らしてから…更に強く引っ張ってるし」

「そんならええわ。」

よう、聞いてや。居酒屋で、チャイナインフルエンザのワクチンを打ったらあかんって話があったやろ？」

3人は事務所から離れるようにコンビニの店内に向かった。

シャッターが降りた店内で倉田と本田は思い思いにレジカウンターに腰掛けたりしながら稲本の次の言葉を待っていた。

「先輩の話では、あの水の中には……現在の科学では分析でけん成分が何種類もあるらしいんや。実はその内の数種類がチャイナインフルエンザに劇的に効くらしい。水分として補給した場合はインフルエンザを叩いてから体内から小便で排出されるらしい。体内に残らんからインフルエンザが発症してからしか効果がないんや。そこで、その未知の成分を壊さずに…」

正直に言えば、壊れるどころか人間の血液に非常に親密性が高くて、血液の主成分のヘモグロビンに結合していきよるんや。何故か、通

常の食料や飲料みたいに体内の内蔵からの吸収はなく、直接血液にしか結合せんらしい。

まるで血液を捕食しとるみたいなんや！ムチャクチャ気味悪いやろ？」

倉本は僅かに理解した様子であつたが、本田はまるで理解が出来ずに店の中をウロウロしながら、棚からガムをつまみ上げていた。

「イナ。と言うことは……チャイナインフルエンザワクチンを接種した人間は……あいつ等みたいになるっちゅうんか？」

「せやな。問答無用にゾンビになつとるからこんだけの時間で蔓延しとるんやろ。それに、噛まれてもアウトの可能性大やな。」

「噛まれてもか？なら、山口はなんでゾンビにならへんのや？」

「そこや！そこがわからんのや。」

「ちょいまち！分かつてる情報だけやけど……山口は普通のインフルエンザワクチンすら予防接もしてへん、しかし子分は接種しとつたな。」

「倉本お、お前の言い方やとインフルエンザワクチンを打つてたら、噛まれたらゾンビになるってことか？」

「せやけど……何で普通のインフルエンザワクチンを打つてただけで噛まれたらゾンビになるんや？」

あまり理解出来ていない本田であつたが、チャイナインフルエンザと普通のインフルエンザの違いは分かったみたいだった。

「噛まれただけでは、唾液が血液に混ざるだけやけど……」

「一応唾液も体液やさかいな。感染するんやろ。」
稲本もそこは曖昧にしか説明が出来なかった。

「稲本、こうは考えられへんか？」

「チャイナインフルエンザワクチンは血液とは直接的に結合出来るが、他の体液とは結合でけへん、せやからインフルエンザウイルスを宿主として噛みついた相手にインフルエンザウイルスとして侵入して体内でチャイナインフルエンザウイルスに変異する。って」

稲本は難しい顔をしながら……しばらく考え込んで

「もし、倉本の仮説が正しいとしたら………」

「したら？どないやねん？噛まれたらゾンビになるっちゅうだけやろ？」

本田が話しに割って入ってきた。

「いや！そんな単純な話じゃないで！」

「単純で悪うございましたね」

すねた本田はいじくっていたガムの包みを開けてガムをほうばり始めた。

「チャイナインフルエンザワクチンは意志を持って宿主を増やしている。増殖しようとしているっちゅうことや！」

「何や、ゾンビの次はリングかいな。チャイナインフルエンザワクチンは貞子の怨念が作り出したんか？」

長野の水は貞子が落ちた井戸から汲み上げとんのかいな？貞子が落

ちた井戸は伊豆かどつかと違っかつたか？」

本田が話しを茶化していたが……

「確かにリングって話しは別にして、地球外生命体とか未知の生命体って線とか……

いや、考えすぎで単なる突然変異なだけかも知れへんな」

倉本の真顔を見て、本田の膨らませていた風船ガムは瞬く間に萎んでしまった。

「どちらにせよ。チャイナインフルエンザワクチンは警察や自衛隊や役人に優先接種した後に一般にも接種が始まった上に、普通のインフルエンザの大流行の兆しでインフルエンザワクチンの接種を受けた人達も大量にいとるやるから……
周りはゾンビだらけってことやな。」

稲本の言葉に倉本と本田は顔を見合い言葉をなくした。

「悲壮な顔したってしゃあないやろ？ 2人ともそんな顔してたら女性陣の質問責めにあうで、顔でも洗ってきたらどうや？」

稲本の勧めで2人は、いそいそと顔を洗いに行った。

さて……ここの食料って言っても……保存が効くやつは菓子とカップ麺くらいしかあらへんし……参ったな。

男達が困り果てている中、女性陣はワイワイと食事の用意を行っていた。

「料理って言ったって……お湯を沸かして、余ったお弁当をチンし

てなんて……倉本さん達に、女のくせしてって言われないかしら」

郁恵は最年長らしく気遣いを見せながら食卓代わりの机の上の食材を眺めていた。

「ビールもあるし、ピチピチの女子高生の由紀ちゃんに奈緒美ちゃんが手酌でもしたら、文句はないんと違う？」

「スープやったら一品増やせるけど？」

奈緒美がク。ールのカップスープを買い物籠から出していた。

「ちょいまって！どんだけ籠城するんか分からへんねんやから、今日・明日は保存の効く食品は残してナマモノや日持ちせえへんやつにしたほうがええんちゃうかな？」

「由紀ちゃん。若いのに……しっかりしてるわねえ。それなのに……私は……」

一品と言われて、一気にツナ缶を5つも開けてしまった郁恵が、6つ目のツナ缶を握りしめながら、シマッタ！と言う顔をしていた。

「おっ！ええ匂いなんか？」

鼻をクンクンさせながら、本田が部屋に入ってきてどっかりと座りこみ、机の上の缶ビールのブルトップを勢いよく引き上げた。

ブッシュュユユッツ

本田は、勢いよく噴き出すビールの泡に慌てて口をつけ、ゴクゴクと一気に缶ビールを飲み干した。

「プファアア！いやあ、ビールが上手いなあ！」
そこへ、倉本が現れて

「コラ！ビールなんか飲んでどないすんねん。」
「ええやんけ。ビールくらい。こないな世紀末、ビールでも飲まな
やってられへんで！」

「アホか！まだどんな危険があるかわからんねん。俺達が順番に警戒せなあかんやろが！へたに飲んで、寝てしまいましたわ、全員の命を脅かすやで」

続いて現れた稲本も、倉本の横で腕組みをしながら本田を見下ろしていた。

「スマン！スマンって……そんなに、怒らんでもいいやんけ。ほら、俺の好物の牛焼き肉弁当は譲ったから……」

本田は、1個しかない牛焼き肉弁当を持ち上げて、倉本か稲本のどちらに渡すかを考え込み、答えが見つからずに女性陣に助けを求めるように情けない顔を向けた。

「まあ、まあ、倉本さんも稲本さんも、そう怒らんでも。夜中の番は私も手伝いますし……せつかくの食事やから、楽しくしません？」

郁恵が仲を取り持ち倉本と稲本も仕方なく机に向かった。

郁恵は本田にウィンクをしながら

「さあさあ、まずはお腹一杯にしましょうね。アルコールはダメみたいやから、ペットのお茶やけど……由紀ちゃん！」

指名？された由紀がペットボトルのお茶を少しだけ持ち上げて

「倉本さん、稲本さん、本田さん。今日は私達4人を助けていただいて、ありがとうございます。こんな事態なんで、何んのお礼もでけへんし、お礼・お礼って言って、また、郁恵さんや香織ちゃんが暴走しても……それはそれで私が困るし……」

郁恵と香織が口々に文句を言い出したが由紀はその文句を無視して言葉を続けた。

「本当に、助けてくれてありがとう。」

最後のありがとうは涙声でよく聞き取れないほどであった。

「みんな、聞いてくれるか？今の由紀ちゃんのお礼で……謝ったりするのは止めにせえへんか？」

助けたと言っても、所詮、コンビニに立てこもってるだけのことやいづれ、この食料もなくなる。その時こそ、みんなで力を合わせなあかんことになる。多分、遠慮なんかしてられへんで、みんな今から助けあう仲間や！俺やイナや本田は……大学からのツレをなくしたばかりやから、乾杯とはいかんけど……な」

「そうね。でも……湿っぱいのはなし。食べましょ」

郁恵の一声で、皆が弁当に箸をつけ始めた。

本田はちゃっかりと、牛焼き肉弁当をほうばっていた。

和気あいあいとした食事もあったという間に全員のお腹に入ってしまった。

タイミングよく、奈緒美がアイスクリームを店に取りにいき、全員でアイスクリームに舌鼓をうっているなか

「1階の警察の人はどうなるんですか？ 噛まれてたみたいやけど…ゾンビになるん？ ご飯はどないするん？」

稲本の横でアイスクリームを食べていた香織が唐突に誰ともなく喋りはじめた。

「乱暴されたんわ…そらショックやけど。何や、1人だけはみごにするんわ、かわいそうなんやけど……」

「香織ちゃん！ それってあかんと思うわ！

テレビで見かける、ヤクザモンの情婦のセリフやん！ あんな奴に情けかける必要あらへんで」

奈緒美が香織に詰め寄っていった。

「せや！ せや！ ほつとき。 あんなん」

本田も同調していた。

「山口くん。 あっ、下の警官の名前な。

取り敢えず彼には朝まではあのままでもいいから。 いつゾンビになるかわからんし、例えゾンビにならへんでも信用はでけへんしからな。」

アイスクリームを食べ終えた、倉本と稲本は、郁恵に本田を任せると目配せをして1階に降りて行った。

郁恵は、由紀と奈緒美に片付けを指示して、本田と香織を連れて隣の部屋に行き、ありったけの布団や毛布を食事をしていた部屋に運びこんだ。

「女性陣はここで寝るんかあ？」

「全員でこの部屋で雑魚寝にしませんか？
いづれ、電気も止まるでしょ？」

この部屋にこれだけの人数で居てれば、それだけでも結構暖くなるでしょ？」

どうせ全員着の身着のままだしね。早くそれにもお互いにも慣れた方がいいでしょ？」

「ああ、俺は別段構わへんけど……」

「それより、布団を敷くのを手伝ってもらえるかしら？
それと……男性女性の境界線には私と本田さんて寝ましようね！」

「へっ？」

訳がわからぬままに準備が整い、女子高生達はさっさと3人が抱き合うようにして布団を被ってしまった。

「おいたはダメですよ！さあ、本田さんも仮眠してくださいね。さあ早く！」

郁恵の勢いに負けて、本田は郁恵の布団の中にもぐり込み、出来る

だけ布団の端に寝るようにした。しかし、この緊張よりも、生死と隣り合った緊張がほぐれた方が大きかったのであろう。数分とたたずに深い眠りについた。

「一応。もしものがあつたらあかんから、渡しとくわ。確か…
イナはハワイがどつかでやったことあるって言うつつたやんな」

倉本は、警官から押収したM37回転式拳銃と実弾10発を稲本に手渡した。

2人が部屋に入ると、気味が悪いほど室内は静かだった。

山口はうなだれる様に頭を倒したまま、微動だにしなかった。

倉本と稲本はお互いに顔を見合い頷きあつた。

稲本は手に持っていたタオルを捻り山口の後方に位置した、ゾンビ化した場合に猿ぐつわをはめるためであつた。

倉本が山口の正面に立ち、木刀で顎の下を持ち上げて山口の顔を正面にむけさせた。

「!？」

一瞬たじろいた倉本は、改めて山口の顔を覗き込んだ。

青白い顔にはまさにミミズが這った後のように何本もの血管が浮き出していた。

「あんたか？怖い兄ちゃんは？」

僅かに呂律が回っていない喋り方であつた。

「山口？」

異変に気づいた稲本が正面にまわってきた。

「山口、今はどんな気分や？」

「ごつつつ気持ちええや。腹へったなあ。肉が食いたいわ」

「名前は言えるか？自分の名前は言えるか？」

「そんなん……腹減って分からへん。ちよつとだけ指かじらせてくれへんか？こ・小指でええわ。頼むさかいに」

コンビニ 2 (後書き)

ご意見・ご感想 どうぞお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0238r/>

絶滅種

2011年3月29日18時30分発行